

2018 年度津田塾大学・住田町連携活動報告書

津田塾大学生が考える地方創生の処方箋

2018年度津田塾大学・住田町地域連携活動プロジェクトチーム
(監修 津田塾大学総合政策学部 森川美絵)

2019 年 3 月

報告書目次

本編

1. 参加者一覧	1
2. 連携活動日程表	2
3. メディア掲載情報	3
4. 学生最終報告書	
1章 雇用のあり方（足立百音）	10
2章 教育のあり方（増田珠美・橋口文実）	17
3章 観光のあり方（保木祥声）	25
4章 移住環境整備のあり方（堀江悠希）	32
5章 祭りのあり方（佐多紀香）	40
6章 コミュニティ施設のあり方（丸田彩夏）	47
7章 地域の魅力の共有（雨宮ゆうか・森崎瑞季）	53

資料編

資料 1. 最終報告会の概要	61
資料 2. 最終報告会資料	62
資料 3. 最終報告会のアンケート結果	80

本 編



<https://www.tsuda.ac.jp/student-life/campusreport/2017/0223-2.html>



1. 参加者一覧

2019 年 2 月 27 日現在
(敬称略)

森川美絵	津田塾大学	総合政策学部	教授
足立百音	津田塾大学	総合政策学部	2 年
雨宮ゆうか	津田塾大学	総合政策学部	2 年
佐多紀香	津田塾大学	総合政策学部	2 年
橋口文実	津田塾大学	総合政策学部	2 年
堀江悠希	津田塾大学	総合政策学部	2 年
丸田彩夏	津田塾大学	総合政策学部	2 年
増田珠美	津田塾大学	総合政策学部	2 年
森崎瑞季	津田塾大学	学芸学部	2 年
保木祥声	津田塾大学	総合政策学部	2 年

2. 連携活動日程表

日時	内容
2018年2月19日(月)	岩手県住田町と津田塾大学の包括協定締結式
2018年6月2日(土)、3日(日)	千駄ヶ谷キャンパス祭での住田町ブースの設置・現地訪問事前打ち合わせ
2018年6月30日(土)	イベント「すみたのごはんあがらっせ！」参加 (会場：東京都港区赤坂 東北酒場 トレジオンポート) 参加
2018年6月20日(水)	住田町訪問オリエンテーション
2018年8月1日(水)～4日(木)	現地訪問（詳細は別途一覧表参照）
2019年2月15日(金)	最終報告会

現地訪問詳細一覧表

日付	内容	対応
2018.8.1(水)	世田米の歴史や風土について学ぶ	せたまい町歩きガイドの会会長 佐々木忍さん
	民泊体験、暮らしのヒアリング	
2018.8.2(木)	世田米商店街の住民からヒアリング	
	地域おこし協力隊の活動と取り組みについてのヒアリング	地域起こし協力隊 下有住 平林慧遠さん 上有住 金野正史さん
	仮設住宅のコミュニティについてのヒアリング	(一社)邑サポート 代表 奈良朋彦さん 下有住地区集落支援員 松田美代子さん
2018.8.3(金)	町に住む若い人の活動についてのヒアリング	(一社)SUMICA 副理事 植田敦代さん
	住田高校生との交流、意見交換	住田高校3年生7名
2018.8.4(土)	役場職員とクップ、意見交換	役場職員(20代)10名

3. メディア掲載情報

掲載場所	内容	URL
住田町 facebook	津田塾大学との連携協力に関する包括協定を締結(2018.2.19)	
東海新報 facebook	相互の資源・人材活用へ、住田町と津田塾大(東京)が連携協定を締結(2018.2.19)	
Web 東海新報	手を取り合い課題解決を、津田塾大学(東京)と連携協定 (2018.2.20)	https://tohkaishimpo.com/2018/02/20/194787/
住田町 facebook	連携協定生かし津田塾大学生来町(2018.8.13)	
津田塾大学 総合政策学部 facebook, Twitter	津田塾大学・岩手県住田町連携プロジェクト(2018.8.3)	
東海新報 日刊, Web 東海新報, facebook	「連携協定」生かし対話、津田塾生が現地活動 (2018.8.3)	https://tohkaishimpo.com/2018/08/03/215516/ (資料1)
広報すみた	津田塾大学の学生が本町を訪問 (平成 30 年 8 月号)	
津田塾大学 総合政策学部 facebook, Twitter	津田塾大学・岩手県住田町連携プロジェクト現地報告会 (2019.2.14)	
東海新報 日刊	・滞在で得た学び発表、包括協定を生かし津田塾大生が研修報告会 ・住田で地方創生学ぶ 津田塾大学・森崎瑞季さん (2 年) (2019.2.17 日刊)	(資料2) (資料3)
住田テレビ	・「津田塾大学の学生たち ～住田の未来のために」 (特集「輝け！すみた」3月号、30分番組)	
広報すみた	住田で学んだ成果を発表 津田塾大学の学生が現地研修報告会 (平成 31 年 3 月号 No.714)	https://www.town.sumita.iwate.jp/docs/2019040300023/ (資料4)

(新聞記事)

資料 1 『東海新報』 2018.8.3 日刊

(新聞記事)

資料2 『東海新報』2019.2.17 日刊

(新聞記事)

資料3 『東海新報』2019.2.17 日刊

まちのホットな話題

住田で学んだ成果を発表 津田塾大学の学生が現地研修報告会

2月15日、昨年2月に「連携協力に関する包括協定」を結んだ津田塾大学（東京都、高橋裕子学長）の学生による現地研修報告会が役場市民ホールで行われました。

この報告会は、昨年8月1日から4日にかけて同大学の学生が本町に滞在し、町内で活動する団体や住民、高校生にヒアリングした結果から、地方創生について考察したものを発表する場として設けられました。

この日は、総合政策学部と学芸学部の学生7人が「住田町3泊4日からの学び」をテーマに▽とどまれの▽呼び込める▽混ざりあえる▽共



▲学んだ成果を発表する学生



▲参加者からも多くの質問がありました

につくるーの4つの分野に分けそれぞれ発表しました。

このうち「とどまれの」の中で「住田町で働く人を増やすには」として発表した総合政策部2年の足立百香さんは、町内で働きたくても希望の職種がなく町外に出てしまっている現状から、新たに雇用を生むための方法について考察した結果を発表。他の地域の事例などから「木工のワークショップ」の開催や「テレワーク」の実施などについて提言していました。

参加者は、地域の課題に関する内容に、真剣な表情で発表を聞いていました。

資料4 『広報すみた』2019年3月号 No.714

<https://www.town.sumita.iwate.jp/docs/2019040300023/>

4. 学生最終報告書

目 次

処方1～とどまれる

1章 雇用のあり方：住田町で働く人を増やすには

(総合政策学部2年 足立百音)

2章 教育のあり方：将来のUターン人材への効果的な進路支援とは

(総合政策学部2年 増田珠美・橋口文実)

処方2～呼び込める

3章 観光のあり方：住田町を訪れる人口増加のために効果的な取り組みとは

(総合政策学部2年 保木祥声)

4章 移住環境整備のあり方：地方への移住・定住促進に求められる住環境整備とは

(総合政策学部2年 堀江悠希)

処方3～混ざり合える

5章 祭りのあり方：住田町における祭り・イベントのあり方とは

(総合政策学部2年 佐多紀香)

6章 コミュニティ施設のあり方：人を呼び込むコミュニティ施設とは一まちや世田米駅を参考にして

(総合政策学部2年 丸田彩夏)

処方4～共につくる

7章 地域の魅力の共有：地域住民が魅力に気づくまちづくりとは

(総合政策学部2年 雨宮ゆうか・学芸学部2年 森崎瑞季)

処方1～とどまれる



1 章 雇用のあり方：住田町で働く人を増やすには

総合政策学部 2 年 足立百音

1-1. 目的

ヒアリング、文献、事例を用いて、住田町で働く人を増やすにはどうしたら良いかを明らかにする。

1-2. テーマを取り上げた背景

人口減少や高齢化に伴い、各地域がそれぞれの特色を生かして持続可能な社会を目指す地方創生が、第二次安倍内閣で提唱された。国もそれぞれの自治体も様々な取り組みを行っているが、継続的に行うためには若者の存在も必要不可欠となる。若者が地方で暮らして行くためには雇用の問題は避けては通れない。岩手県住田町は若者、高齢者の人数ともに減少傾向にある。住田町の将来ビジョンによると、2010 年から 2014 年に向かって、若者は 2000 人弱減少し、高齢者は約 1000 人減少するとされている（表 1 参照）。労働力人口の推移を見てみると、昭和 30 年には 78.3%だったのに対し、平成 22 年には 54.0%と減少している（表 2 参照）。

また、住田町の調査によると、「住田町に住み続けたいですか」という質問に対し、男女合計約 25%の人が引っ越したいと回答していた。その理由として、買い物に不便だという理由について、町内に仕事がないという理由が挙げられていた。また、町の取り組みに対する満足度と重要度の表を見てみると、雇用・雇用情報の満足度は低く、重要度は高いという結果であった(表 3 参照)。これらのデータ、ヒアリング内容、文献、事例から住田町の雇用について考察する。

表 1 住田町の将来推計人口（住田町人口ビジョンより）

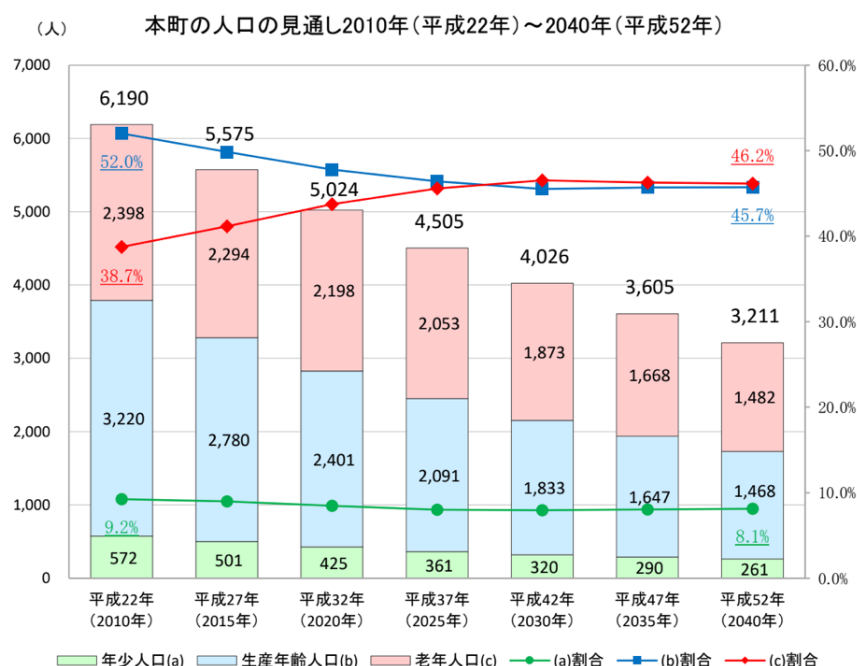
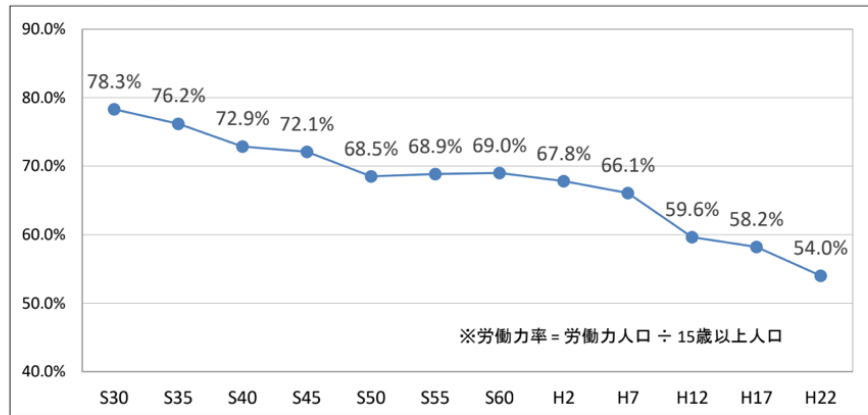


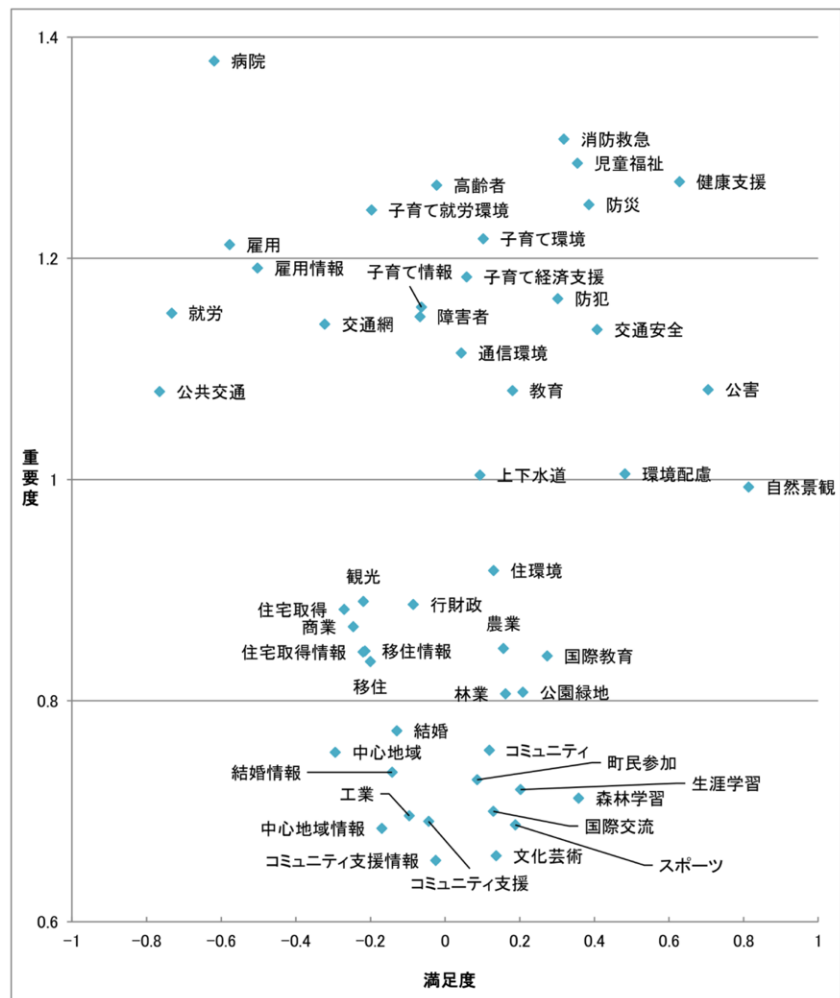
表2 労働力人口の推移

○ 労働力率の推移



[出典] 国勢調査

表3 町の取り組みに対する満足度と重要度（住田町作成アンケートより）



1-3. 調査方法

①ヒアリング

本調査研究では、2018年の8月1日～4日に岩手県住田町で様々な方を対象にヒアリング調査を実施した。その中で、住田町の雇用に関する現状、進路に関する希望、雇用創出のための提案などのお話を聞くために、一般社団法人 SUMICA 副代表理事、住田高校の高校生、商店街に住む A さんを対象にヒアリングを行なった。

②文献調査

地方創生に関する先行研究を収集して、その内容から問いに関わる知見を整理して、本報告に関わる内容を整理する。以下は利用した参考文献である。I の文献を選んだ理由は、この論文では北海道の IT 産業に関する事例が挙げられており、首都圏から離れた場所という共通点があるほか、IT 産業は雇用の問題を考える上で重要であると考えたため。II の文献は、大学教授、経済産業省職員、県庁職員、市役所職員といった様々な立場から地域の産業について議論し、デザイン産業が地方にどう影響を与えるかなど、デザインと地方についての言及が多くあったため。

i. 伊藤実(2004)「日本の地域産業・雇用創出の現状—3つの成功モデルを中心として—」,『イノベーション・マネジメント』,p.25-35, 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター

ii. 吉賀唯夫、植木謙治、藤元正二、入江準男(2001)「座談会「地域産業とベンチャー企業」」,『デザイン学研究特集号』,p.2-15, 一般社団法人日本デザイン学会

③事例調査

人口の減少が進んでいる中で、雇用を創出するために様々な自治体で対策が行われている。住田町で実際に行われている活動に加えた新たな活動を提案するために、事例を整理した。

1-4. 結果

①ヒアリング

＜一般社団法人 SUMICA 副代表理事＞

質問：若者が住田町で生きていくための生計のたて方を教えてください。

答え：住田町の現状について、若者が住田町に住みたいと思うようになるには、稼がなくても暮らしていける地方であってもしっかり利益を生み出して働ける環境を整える必要がある。

質問：地域の暮らしを良くすることにコミットしながら、生活の価値も自分で作っていくのですね。その例を教えてください。

答え：また、住田町ではデザインなどで行った目に見えないものにお金を払う習慣がなかったけれど、役場が予算を出してくれた。やり続ければデザインをやりたい人が住田町に帰ってくる、移住してくるかもしれないという未来のことも、役場と一緒に考えてくれる。

＜住田高校の生徒＞

質問：大学卒業後に地元に戻ってきたいと思っている人は、その理由を教えてください。

答え：大学卒業後の進路について、人とのつながりを消したくない。知っている人が多く働きやすい。長男だから家を継ごうと考えている。親の介護が必要になった時に帰ってきたい。

質問：どんな職があれば住田町に戻ってきたいと思いますか。

答え：ホワイトハッカー。時給が上がったら戻ってきたい。

<商店街に住む A さん>

質問：ご職業はなんですか。

答え：家の近くで木材の製材所を経営している。More Trees¹の活動で、六本木ヒルズにも木材を提供。

質問：困っていることはありますか。

家の製造業の後継者がいないこと。周りに町外から来た若者はいて、その人は家族で移り住み、木工の仕事をしている。

質問：震災時の木造仮設住宅について教えてください。

答え：震災前からたまたま木造住宅を産業として準備しており、震災の後に More Trees と共同で早急に木造住宅を作った。

②文献調査

i .北海道の IT 関連産業

IT 関連産業は札幌に集まっており、「サッポロバレー」と呼ばれている。これは数社のコア企業とそこからスピアウトした企業群によって支えられている。コア企業は、北海道大学の教授が立ち上げた「マイコン研究会」で学んだ学生たちが設立したものである。そこで働く人の多くが北海道大学の卒業生であり、新卒採用で就職する人もいれば、東京で就職した後 U ターンしてくる人もいる。さらに、北海道と縁のない東京などの出身者が高い技術力や生活環境の良い札幌に憧れて、就職するケースも増えている。

一方で、サッポロバレーを支えている企業は北海道大学を核とした狭い範囲のものであるため、成長を支えてきた濃密なネットワークが成長の妨げになっている面もある。サッポロバレーの企業が開発しているアプリケーションは地域密着型のものが多く、売上を急速的に伸ばす可能性が低く、企業成長に限界がある。今後は東京などの大都市とビジネスネットワークをいかに広げられるかが成長の課題である。

¹ 森の保全活動にとどまらず、製品などを年に届け、対価を森に返すことを目的として活動している。
(More Trees ホームページより)

ii. デザイン産業

デザインはサービスだと思われることが多く、対価を払うという意識がない。そのため、デザインビジネスは成り立たせるのが難しい。デザインビジネスが成り立つとすれば、メディア系、ビジュアル系、プロダクト系に分けてみて、そのうちのメディア系であれば時給換算が可能である。また、自らが作り出すことで最終商品が出来上がるのでベンチャー企業を立ち上げやすい。しかし、プロダクト系はそうした計算が難しい。

プロダクト系の場合、デザイナーが自分で製品を作るわけではないので、どこかの製造業と結びつかないと、専門ビジネスにならない。プロダクト系の人が産業とどう結びついてベンチャー化して行くのが課題である。

③事例調査

I. 島根県隠岐のテレワーク

隠岐地域は離島なので、物流の便が悪く、産業振興の大きな障害となっている。しかし、テレワークを利用すれば、そのハンディを消すことができる。テレワークとはパソコンなどの ICT 技術を利用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方のことで、仕事内容は事務系、デザイン系、編集系など様々。島での新たな雇用の場を創出し、ICT 産業を創出することを目的として、事業補助を受けて実施している。

II. 福岡県豊前市^{ぶぜんし}のサテライトオフィス（富士通コミュニケーションサービス株式会社）

サテライトオフィスとは、大企業のコールセンターなど一部の機能を請け負う小型のコンタクトセンターであり、年齢や性別を問わない雇用を生み出すことができる。ライフスタイルの時間的制約によって働くことができなかった女性や、中高年者の活躍の場になることが期待される。

III. 三重県伊賀市島ヶ原地区での木工ワークショップ

林業と製材と木工をつなげて体験できる、「家具作り教室」などのプログラムを展開している。週末に泊まり込んでもらい、木製の机や本棚などの家具、おもちゃを作るプログラムを実施する。また、林業の現場や伐採された木材の製材などを見学して、林業の始業から木工作品が出来るまでの一貫したプロセスを理解できる環境型・体験型の学習プログラムや、その他の地域資源を体感できる「エコツアー」なども合わせて行っている。ものづくりに関心のある大学生の参画によって進められており、1300 人の大学生が参加した。この活動は島ヶ原地域と都市部との地域間交流のきっかけにもなっている。また、伝統木工技術の継承とデザイナーの育成も今後目指して行く。

1-5. 考察

住田町のデータやアンケート調査から様々なことが読み取れた。まず人口、労働力人口

ともに減少傾向にあること。町民は雇用について重要視しているが、満足度が高いこと、住み続けたるためには、雇用を充実させることが重要であるとわかった。

利益を生み出しにくい環境の中で、稼ぐことを良いことだと広めていくことがまず大切になる。その後、今住田町ですむ高校生などが住田町で働きたい、一回出たとしても戻ってきたいと思うためには、雇用の充実が必要である。高校生は人とのつながりや家族の介護などの理由から、住田町で働きたいと考えている人もいる。そうした中で、時給が低いことや働きたい職がないということが理由で、住田町で働くことができなくなってしまうことは非常にもったいない。そのため、雇用を増やすことや安定した職が存在することが必要となる。特に、IT 産業やデザイン産業の雇用を充実させていくことが効果的であると考えられる。教育機関と協力したり、ほかの産業と協力するなど、どこかと結びつけることでうまく機能するのではないかと考えた。しかし、大学などの教育機関と協力して IT 関係の企業を作った場合、そこから全国に広げて行くことが難しく、デザイン系の職で稼いでいくことも簡単ではないという問題がある。そうした問題を繰り返さないために対策は必要である。

事例調査と住田町の現状から、木材のワークショップを作ることとテレワークの利用をすることで、雇用を充実させることができるのではないかと考えた。

提案①木材のワークショップ

まず、住田町は大震災時に仮設住宅を木材で作るなどの実績があること、木の有数な産地であることから、林業の良さを外に広めるには効果的な場所であると言える。しかし、ヒアリングの際に後継者がいないことを困ったこととしてあげていたので、デザインやものづくりに興味のある大学生と地域を結びつけることで、住田町とかかわりその後興味を持って働きにくる人がいるのではないかと考えた。私たちが仮設住宅を見に言った際に、東京大学の学生が仮設住宅地域に木材を使って休憩所作っていた。都内の大学生と地域を結ぶ取り組みとしてすごく良いと感じたため、これを応用できないかと考えた。まず、大学生は大学で学んだ後の実践の場がなかなかないため、実際に製材所で木材の加工やワークショップの企画をすることが、学習のアウトプットとしても効果的である。実際に住田町の木材に触れることで、ここで働きたいと思う人が出てくる可能性もある。また、製材所で働く方から見ると、現在の仕事に追加する形でプロジェクトを進めなければならないため、手間がかかる一方で、後継者の確保や、製材所の知名度をあげることができる。後継者を他の地域からよび、また木工ワークショップとして観光地化することで、雇用も創出でき観光も活性化し、一石二鳥である。

提案②テレワークの推進

周囲の人の暖かさや家族のために、住田町で将来働きたいと言っている高校生がいる一方で、働きたい仕事がないという高校生もいた。働きたいけど職がないと思っている高校

生に向けて、テレワークを紹介することで、住田町で働きたいと考えるひが増えるのではないかと考えた。理由は、テレワークの業務内容は様々で、デザインをはじめとして事務職、営業職など様々な職種で導入されている。テレワークは広がって来ている一方で具体的にどのような働き方ができるのかを知らない人が多いので、積極的にテレワークを紹介していくことが住田町での雇用の創出につながるのではないかなと思う。

1-6. 結論

岩手県住田町は、人とのつながりや自然の豊かさなど、素晴らしい点がたくさんある。また多くの人が雇用の創出に意味を見出していることも事実であり、住田町ならではの雇用確保の方法を他の地域の事例やヒアリングなどから模索し、提案した。林業を生かして他の地域との結びつきを強め、住田町で林業を行う人を増やすと言う活動や、新しい働き方の提案など、住田町の現状を考えての提案を行った。現在行なっている活動をより活発にしていくことと、新しいことを取り込んでいくことはどちらも同じくらい大切である。残された課題として、これらの実現可能性の分析がある。今後は現状をより調査し、具体的な内容を考えていくことが必要である。

1-7. 参考文献

一般社団法人日本テレワーク協会『テレワークの導入・活用』

< http://www.japan-telework.or.jp/intro/q_a.html > アクセス日：2018年1月28日。

伊藤実「日本の地域産業・雇用創出の現状—3つの成功モデルを中心として—」,『イノベーション・マネジメント』2004年、p.25-35。

オルタナ『alterna online』< <http://www.alterna.co.jp/4102> >アクセス日：2018年1月28日。

富士通コミュニケーションサービス株式会社『自治体通信 ONLINE』

<https://www.jt-tsushin.jp/interview/jt12_fujitsu/>アクセス日：2018年1月28日。

有限会社 Will さんいん隠岐オフィス『隠岐の島どこでもテレワーク』

<<https://www.oki-wa.jp> > アクセス日：2018年1月28日。

吉賀唯夫、植木謙治、藤元正二、入江準男「座談会「地域産業とベンチャー企業」」,『デザイン学研究特集号』2001年、p.2-15。

2 章 教育のあり方：将来の U ターン人材への効果的な進路支援とは

総合政策学部 2 年 増田珠美・橋口文実

2-1. 研究の背景・目的

高校生の頃からライフプランが確立している学生は多くない。中高生が思い描く将来についての意識調査では、10 年後の未来に不安を抱く高校生は 53.0%である。しかし、10 年後の自分の未来を具体的に考えたことがある高校生は 18.1%であった（ソニー生命保険株式会社、2017）。

8 月の住田町でのフィールドワーク時に、住田高等学校の高校生男女 7 人に、住田町での暮らしについてのインタビューを行った。将来の進路について伺うと、岩手県内に進学希望が 2 名、県外進学志望が 2 名、未定が 3 名だった。また、大学進学後に地元の住田町に戻って暮らしたいという学生は 4 名、戻って来たくないという学生は 2 名、未定は 1 名だった。さらに、将来の夢が決まっている人は 2 名のみだった。戻って来たくない理由としては、「希望する職種の就職先がない」「給料が低い」ということが挙げられた。

地方出身者は、誰もが『将来も地元で暮らしていくかどうか』という選択を誰もが迫られる。その点を踏まえた具体的かつ現実的なライフプランが、今の高校生の進路支援で必要なことではないのだろうか。そうであるならば、どのような環境整備があれば、ライフプラン設計を行いやすくなるのだろうか。

また、地方就職、およびそれを意識したインターンを経験するということを視野に入れる地方出身大学生を増やしていくためには何が必要なのだろうか。

以上 2 点の考察をまとめ、住田町で働くことに前向きになる若者を住田町内外から増やすことを本研究の目的とする。

2-2. 研究方法

① 先行研究の分析

- i. 『地方における高校生の進路選択の特性と要因 ―「福島県高校生調査」の分析―』（遠藤健・沖清豪、2017）
- ii. 『地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ』（窪田玲奈、2012）

以上 2 点の先行研究から、まずは地方地域にすむ高校生全般が抱える課題とは何かを探る。

② 住田高校の教育支援の分析

- i. 2018 年 8 月 3 日の住田高校訪問における、住田高校生 6 名のヒアリング調査
- ii. 2018 年 4-6 月に行われた住田高校ヒアリング調査
- iii. 住田町総合教育会議資料

以上 3 点の住田高校生の調査から、住田高校生が抱える課題を明らかにすると

もに、住田高校の教師陣・彼らの親世代・彼らの暮らしを支える住田町住民が抱えている考えを洗い出す。

③ 住田町教育機関による地域密着型学習の例

住田町立世田米小学校では、「地域創造学」が平成29年度に新設された。この教科は、住田町の人材流出、地域の衰退への不安などの課題に対する中・長期的な人材育成の計画であり、町内の小・中学校および県立高校と連携した研究開発である。

若者のUターンのきっかけになる「町に対する理解」や「愛着」を高める教育について探る。

④ 一般社団法人 SUMICA による地域支援の例

一般社団法人 SUMICA は、「すみた活性化のため」「すみたの将来のため」「すみたの未来を担う子供達のため」を掲げ、住田町を進行するイベント、観光、文化、雇用、交流、人的資源などを生み出す場として機能することを目的とする一般社団法人である。

2018年8月3日にまちや世田米駅で実施した、一般社団法人 SUMICA の A 氏のヒアリング調査から、当団体の活動が住田高校生の進路支援につながる例を探る。

2-3. 研究結果

① 先行研究の分析

『地方における高校生の進路選択の特性と要因 ―「福島県高校生調査」の分析―』(遠藤健・沖清豪、2017)

地方における高校生の学力の差は、県外進学に影響はあれど、将来のUターンには関係ない。18歳で県内就職する人材は、伝統的な家族観が内面化している。また教師たちは、進学には県内思考・就職には県外志向の影響を与えていることが判明。

『地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ』(窪田玲奈、2012)

北海道夕張市の高校生の進路指導における課題は3つある。1つ目は、北海道夕張市における産業と、高校生が持つ地元就職イメージのギャップ。2つ目は、教師たちが進路指導の際に、就職から進学へと意識を持ち替えていること。3つ目は、蓄えの少ない家庭の地方進学者にとって、奨学金を払い戻しながらUターンで働くということが非現実的であること。

② 住田高校の教育支援の分析；自学自習支援（住田町教育委員会）

進路を意識し始める住田高校生は、高2の後半～高3がほとんどであるという。さらに、町内では限られた学問・キャリアにしか出会えないと言った課題も見え始めた。

生徒たちが希望する職種の例としては、看護師、消防士、医療福祉の仕事、保健体育の先生、就職、大学進学が挙げられた。

また、住田高校では、生徒への支援強化のため、2018年の4月から教育コーディネーターB氏を配置。同年に行われたヒアリング調査によると、住田高校での生活において、2つの課題が発見された。

i. 競争の機会が少ない生徒たち

『高校生の「諦め」は、生まれ育った環境や自分に対する「誇り」と「自信の無さ」と、表裏一体の関係にあります。』（総合教育委員会資料、住田高校自学自習支援の取り組み）

- ・競争が少ない環境（勉強で上位に入りたい、部活でレギュラーメンバーを勝ち取りたいと思う競争の規模が、都会と比べ小さい）
- ・自信がない生徒が多い傾向

ii. 町との関わりが薄い

- ・過半数の生徒がバス通学であり、町外からの通学者は住田町を知らず過ごしてしまう
- ・町と学校間の情報送受が希薄
- ・部活動が忙しすぎる

これらの課題から、B氏は、「住高生のチャレンジを応援する『住高生の居場所』を地域に作ることで、子供の声を尊重できるのではないか」という（東海新報、2018年5月30日）。

これに伴い、同年6月6日には住田町の教育委員会はテスト期間に合わせ、バス停近くの定食屋「寿美多うおまさ」をバスの空き時間に使用するための自習スペースとして提供。さらに、同年10月15日からは研修会館ないにも自習スペースを設置。研修会館は、進路のモヤモヤを解消するお手伝い、様々な職業を知る機会や大学生と交流する機会を生み出して行きたい、と考えている。希望する進路の実現に向けての活動としては、「スタディサプリー」や学習支援スタッフの活用を視野に入れている。

住田高校の教師陣からは、学生が「外」の世界を見る機会を増やしたい、また、生徒数が少ない分教師の数も少ないので専門分野を一人で教えるのはかなり大変である、という声が上がっている。

住田高校の生徒の保護者からは、大学進学していないので進路に対して情報・経験ともに不足している、経済力の不安、高校からの進路情報提供がありつつも響かない、といった声が上がっている。

地域住民からは、住高生の自信になるような経験を積む機会を郊外にも与えてほしい、生徒による主体的な進路決定を妨げる声がけ（住田にずっといる、など）が周囲から行われているのでは、という声が上がっている。

③ 住田町教育機関による地域密着型学習の例

「地域創造学」の目的は、住田町の人材の社会的実践能力を据えた教育課程の編成・社会的実践力を公開的に育む指導方法を探ること・社会的実践力を評価するための指標開発を置いている。

実際の指導計画の内容は以下の表である。第6学年での指導内容は、「わが町再発見～比べてみよう、仙台市・平泉市・住田町～」であった。3つの都市を比較しながら見学し、出会う人や物と積極的に触れ合い、発表会に臨む。住田町の自慢・良さについてを再確認する内容となっている。

また、教育研究所を母体とした地域創生学を柱とする体制作りに向けて、数々の取り組みがある。森林環境学習研究部会では、五感を通して自然に触れ、その美しさや多様性に感動し、郷土を愛する園児、児童、生徒を目指す子供の姿としている。研究活動の実施としては、保育園は森の保育園、小学生は住田町の野山や川の見学や体験学習、中学生は山の体験学習、間伐体験学習、木工団地見学などを行なった。その他の活動には、グローバル習研究部会や、いのちの学習研究部会などがある。

④ 一般社団法人 SUMICA による地域支援の例

地域支援として『SUMICulture』『LIFE+』という企画を定期的に行なっている。“ ”内のコメントは、住田町で SUMICA さんが運営するまちや世田米駅で、津田塾大学が SUMICA 理事の一人である A 氏にヒアリングを行った際にいただいたものである。

『SUMICulture』

「デキルを探す!!」をテーマにした、SUMICA 主催のマナビの場。タノシク暮らす。オモシロイを創る。アタリマエを体験に。様々な分野で活躍する方々をお招きし、事例を参考にジブンゴト化する場。

“そういう枠組み(地域おこし協力隊の人のこと)で活躍している人たちがとても多いので、その人たちを住田町に呼んで、そういう人たちの取り組みを聞いて、住田の人が私のような外ものでなくて、住田に住んでいる中の人住田のことを誇りに思ってもらえる講演会ができたらいいなと思って作った勉強会。香川県の小豆島で地域おこし協力隊をしながら起業して、のような人を第一回に呼んだ。それからは、岐阜県の白川郷の地域の方や、岡山県の西山くらの地域の方、愛知県名古屋の社長とその人と協力している行政の方を呼んでトークセッションをやってもらった。”

“目的は、『実は外から見たら、すごく価値があるもの』ということを外の視点から住田町に住んでいる人たちに話してもらおうという企画。(中略)長野県塩尻市役所の山田崇さんや、三重県尾鷲市の商工会で働きながら起業している方や、三重県紀北町に U ターンして IT 会社を作った人が知り合いだったので、お話をした。”

『LIFE+』

2015年1月、限定50名の会場に70名を超えるファンが集い、TOSHI-LOWのアカースティックライブを堪能する。ホンモノの音楽に、生で触れ、体感することで、会場が熱い感動に包まれました。(Facebookより)

“本物を知ってもらおう企画。めっちゃめっちゃ田舎で、夏休み冬休みにくるならゆっくりしていいなと思うけれど、ここには日々暮らしている子供達・ここで一生を終わるような人の暮らしがあるなかで、田舎にいたら本物に触れられないというのは勿体無い。東京にいれば求めていなくても情報が勝手に入ってくるが、ここ(住田町)にいと自分が「欲しい」と思わないと情報が入ってこない。そうではなくて、「こんな田舎でも本物って感じられるんだよ」というのをぜひ子供から大人まで感じて欲しい・日々の暮らしに少しでも+な楽しみを見出して欲しいという企画。”

2-4. 考察

住田町教育機関で行われている進路支援は、まず小中学校時代に住田町への愛着を育てる研究授業をした後に、高校生になってから学習に対するサポートを行っているということがわかった。現時点の住田の高校生が抱える課題としては、大きく分けて3つあった。一つ目は自発的な行動を実施する自信が十分でないこと、二つ目は住田町民の方との交流が極端に減ってしまうこと、三つ目は規模の大きい競争・町外の人や年代の近い年長者(大学生・社会人)の経験や考えに触れる機会が不足していることである。また、先行研究を踏まえると、将来の住高卒生徒によるUターン就職の障壁になりそうなのは、経済的問題だ。窪田(2012)でも言われていたように、蓄えの少ない家庭の地方進学者にとって、大学学費としての奨学金を払い戻しながら住田町でUターン就職を選択するのが難しい。

よって、進路支援は「自発的に考えるきっかけ」・「町外の年長者との交流」・「経済的視点で見た将来プラン」の3つの要素を入れるべきである。そして、それを行う場は学校ではなく、学外であり住田町民の方が集まる場所で町民と一緒に考えていくべきであると思う。以上をふまえ、住田の高校生の進路支援は、住田町に住むみなさん・SUMICAさんと協力して取り組んでいくのはどうだろうか、と考える。

その根拠は以下の2つだ。一つ目に、SUMICAの活動は、いわば住田の高校生にとって進路支援の一種になり得るものであったということだ。SUMICAの掲げる「すみた活性化のため」「すみたの将来のため」「すみたの未来を担う子供達のため」の目標に基づいたイベント『SUMICulture』や『LIFE+』などは、住田の高校生が住田町教育機関による地域密着型学習によって気づいてきた「住田町とはどんな土地か」というイメージを、町内外の視点から照らし合わせる機会になる。それにより、住田町に対する愛着がさらに沸くのではないかと考える。二つ目に、定期的に高校生がSUMICAが活動するまちや世田米駅を訪れることで、そこで働く植田さんたち(Uターンを経験している大人)やインターンしている大学生(Uターンを視野に入れている大学生)の姿を見ることができるとは、

住田町で若者が働くことにプラスのイメージを与えてくれるはずだ。これが、また、大学受験を控える学生にとっては、実際に直近の大学受験を経験した人に話を聞ける機会が必要だ。

経済的視点で見た将来プランについてのアプローチとしては、住田町の産業や暮らしにかかる費用のデータを町民と一緒に分析するのはどうだろうか。メリット・デメリットを他県と比較するのも良い。町で行なっている就職・子育て支援の例を紹介したり、住田町の企業研究を実際に働いている人の声を交えつつ行なったり、各家庭で将来進学・就職の支出について話し合ったりするのが効果的であると考えている。

また、進路を決めた後の学習に対しては、住高生たちの勉強に対するチャレンジを応援する「居場所」として、自習スペースを町内に提供する取り組みが活発になっていた。学外進路支援を行い学生の進路目標を町内でオープンにするメリットとして、自主スペース提供時に、町民みんなで学生一人一人の進路を応援することができることが挙げられる。目標に対する現時点の進捗状況や、進路先に関する情報提供などで、町民みんなが住田の高校生に関わっていくことができる。大学進学の流れを知らない家庭も、町のみんなに不安を相談できる機会もできるはずだ。

2-5. 結論

住田町でまちや世田米駅を訪れた際、この施設を運営する SUMICA さんの活動は『出身地問わず、住田町を好きになれること・地方で暮らしていくことの可能性を広げてくれるイベント』と感じた。しかし、この施設に高校生の姿が見られなかったことが不思議だった。

住田町の未来を担うのか、もし担うとしたらいつから担うのか。そういった将来の自分の U ターン設計をする際に、地方就職のマイナス面ばかりが浮かんでくるのではなく、生まれた土地住田町の良さを思い出し、それを自分ならどう広げていけるのか、を考えられる若者が、街と密接した進路支援によって誕生していってくれば、と筆者は考える。

遅かれ早かれ、地方出身者は帰郷について考える機会がやってくる。それが就職後で後悔した時、進学後に就活前などに追われてするものであるのは忍びない。高校生のうちからプランニングすることにより、地震の故郷の課題に向き合うことは、地方地域に住む若者として全国で先陣を切っていける存在になれるだろう。

2-6. 参考文献

ソニー生命保険株式会社『中高生が思い描く将来についての意識調査 2017』2017 年 4 月 25 日、<https://www.sonylife.co.jp/company/news/29/nr_170425.html>（アクセス日 1 月 28 日）

遠藤健・沖清豪（2017）『地方における高校生の進路選択の特性と要因 — 「福島県高校生調査」の分析—』

窪田玲奈（2012）『地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ』

東海新報『住高生に「居場所」提供、バス通学の声反映／住田町がテスト期間に合わせ支援』、2018年6月30日付8面、< <https://tohkaishimpo.com/2018/06/10/208489/> >（アクセス日1月28日）

東海新報『住田高校の支援策強化へ、町教委が独自事業で教育コーディネーター活用』、2018年5月30日付1面、< <https://tohkaishimpo.com/2018/05/30/207118/> >（アクセス日1月28日）

住田町立世田米小学校、有住小学校、世田米中学校、有住中学校、岩手県立住田高等学校
『平成29年度研究開発実施報告書（第一年次）』、2018年3月

一般社団法人SUMICA Facebook < <https://www.facebook.com/sumicasumita/> >（アクセス日1月28日）

処方2～呼び込める



3 章 観光のあり方：住田町を訪れる人口増加のために効果的な取り組みとは

総合政策学部 2 年 保木祥声

3-1. テーマを取り上げた背景

近年、少子高齢化に伴って地方の人口減少を食い止めるため、地方創生が重要視されてきている。政府も地方の人口減少を止め持続的な社会を創生できるように地方創生政策を行っている。そして、地方創生的手段として観光がクローズアップされ、各地で観光に対する取り組みが強化されている。その背景には、人々の価値観が変化し、物質的な豊かさよりも精神的な豊かさが大事にされるようになった結果、都市地域だけではなく農山村地域などの地方においても自然や文化・産業・人などの独自の地域資源を活用した観光による地域活性化の可能性は大きくなっていることが挙げられる。岩手県住田町では、歴史的資産や町の魅力は十分あるもののそれが観光面では十分有効に活用されているとはいえず現状がある。他地域との差異をつけ特色のある観光を創出し発信すること、より多くの人を訪れる仕組みを作ることが求められている。このような理由から、このテーマを設定した。

3-2. 研究方法

以下の4つの課題を設定することにより、住田町を訪れる人の増加に向けた取り組みを模索していく。

課題1で、そもそもの日本における旅行者が旅行先を決める際に何を意識するのかを以下の2つの資料より明らかにする。

- ① 経済広報センター「観光に関する意識・実態調査報告書」2010年11月、15-21。
- ② 濱田 泰「観光統計を活用した観光地の魅力の定量化についての研究」2011年3月、74-80。

課題2では、日本国内で、住田町と似ていると思われる他の自治体における観光の成功例を以下の資料より分析し、住田町に参考になる考え方や取り組みを考察する。

観光庁「観光地域づくり事例集」

課題3では、観光地として住田町を捉えた際に見えてくる住田町の現状と課題を明らかにする。住田町に関わるそれぞれのWebサイトやSNSを概観し、観光客が求める情報の発信の仕方を考えていく。

課題4では、住田町でのヒアリングから得られた回答を基に、住田町に暮らす人々自身が考える町の魅力やアピールしたいことなどを明らかにする。

これらの課題から明らかになった事を合わせて考え、住田町を訪れる人の増加に向けた効果的な取り組みを考察していく。

3-3. 結果

課題1 旅行者の旅行意識

① 経済広報センター「観光に関する意識・実態調査報告書」より

経済広報センターの調査によれば、国内観光地を選ぶ決め手の1位は「自然の豊かさ」、2位は「歴史・文化」、続いて「観光地およびそこまでのインフラ（国内交通ネットワークの充実）」であった。（以下図1。）世代別で見ると、世代が上がるにつれ、「自然の豊かさ」や「歴史・文化」を決め手とする人の割合が高くなる傾向がある。

また、国内旅行に関する情報入手源に84%がインターネット、58%が旅行情報誌・ガイドブックを挙げた。

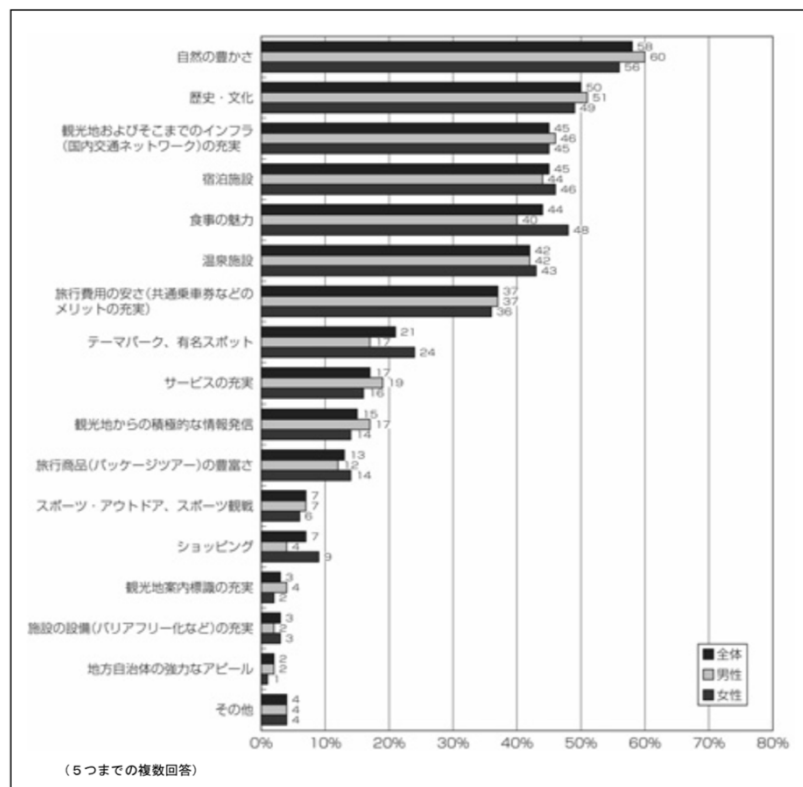


図1 国内観光地を選ぶ決め手（観光に関する意識・実態調査報告書より）

② 濱田 泰「観光統計を活用した観光地の魅力の定量化についての研究」より

濱田は、豊かな旅行経験者が旅において大切にしている要素の選択から導かれた旅行者のパターンを分析し、「7つの旅行者イメージ」として以下のように分類した。そして、旅行者が求める観光地への価値観は複雑化していると述べている。

濱田は、旅行者を、日常生活から離れること自体に価値をおく傾向にある人々を「物見遊山の旅行者たち」、自分を尊重してくれる、歓待を受けるなどのもてなしを受ける旅を重視する人々を「大名旅行の旅行者たち」、心身ともにリフレッシュして自分の気持ちや体制を整える旅をする傾向の人々を「元気になるための旅行者たち」、家族や友達・仲間などの同伴者で行く旅を重視する人々を「やじきた道中の旅行者たち」、日常生活から解放されることを重要視する人々を「逃避志願の旅行者たち」、あえて下調べをせずに現地での情報収集を楽しむ行き当たりばったりの旅を重視する「風来坊の旅行者たち」、逆に事前に情報を入手し計画性を重視する人々を「幹事タイプの旅行者たち」と7つに分ける。これらは、観光地の魅力の改善や対策に参考になる、と述べている。

課題2 他地域の成功事例・成功要因分析

・【「戦略的地域名称」】

新潟県越後湯沢・群馬県みなかみ町 一般社団法人雪国観光圏

理念を共有する意識の高い民間事業者が多く事業に参加している点が成功につながっている。今までハンディキャップであった雪国の暮らしを、「世界に発信する雪国文化」として捉えることで地域に対して将来性を感じられるようになった。雪国によって育まれた文化や雪国の知恵を、地元のフリーペーパーや各種メディアの取材で発信し続けてきた結果、「雪国文化」という言葉が使われる商品やコメントが非常に多くなった。自治体を紹介するときに「雪国・越後湯沢」のように表記するケースも多く見られた。

徳島県三好市 大歩危・行ってみる会

観光地としては有名だったが、温泉のイメージがあまりなかった。そこで温泉をアピールするために、「大歩危・粗谷温泉郷」という造語を掲げ地域一体となった営業活動を行った結果、宿泊ができる温泉地というイメージを作り上げ、滞在できる地域として認知されるようになった。

・【農業の活用】

栃木県大田原市 (株)大田原ツーリズム、大田原グリーン・ツーリズム推進協議会

大田原市は、農業従事者の減少や高齢化による農業衰退の危機、また観光資源の乏しさから、他の地域と比べて観光客が少ないという課題を抱えていた。その最中、官民一体で(株)大田原ツーリズムが設立され、農業体験をしながら農家にとまる「農泊」を事業の書くとして日本古来の生活、産業、文化等の地域資源を活用した旅行体験プログラムの提供を行い始めた。農業体験や安全管理に関わるスキルアップを図ること、また受入れ農家の副収入増加がこれらの事業が地域に根付いた要因とされている。

課題3 住田町の現状・課題

*住田町の現状、課題だと言われているもの

まず、見つけることのできた住田町関連の Web サイトを挙げる。Web サイトは、町外の人が住田町を訪れようとし、下調べするときに重要な情報源となるためである。

- ・地域ポータルサイト「すみたっち」<<https://www.sumita-chi.info>>
- ・住田町役場 HP <<http://www.town.sumita.iwate.jp/kanko/>>
- ・住田町観光ナビ（住田町観光協会）
<<http://sumita-kankou.wixsite.com/sumita-kankou>>
- ・すみたがやがやドットコム<<http://www.sumita-gayagaya.com>>
- ・住田町観光協会、すみっこの部屋、まちや世田米駅など各 Facebook アカウント

次に、観光地として住田町を捉えたときに課題だと言われていることを挙げていく。

最寄りの新幹線駅からのアクセスが不便であり、公共交通による移動手段も限定的である。また、主要観光地（種山ヶ原や滝観洞）と市中心部の物理的遠さや、住田町の知名度の低さ、町内観光スポットの知名度の低さも課題となっている。宿や民泊体験、食事場所の受け入れ規模が市場需要に合わない現状も指摘されている。

Web 東海新報「魅力・所得向上を見据え観光プラットフォームが始動」『東海新報』2016 年 9 月 28 日付 1 面より

課題4 住田町でのヒアリング結果より

以下の方法で、住田町の魅力についてヒアリングを行った。

日時：2018 年 8 月 1 日（水）～2018 年 8 月 4 日（土）

対象	日時	場所
世田米まち歩きガイド	8/1 14:30~16:30	住田町役場 役場交流プラザ
民泊	8/1 夜	民泊先のお宅にて
商店街に住む高齢者	8/2 10:00~12:00	高齢者宅
地域おこし協力隊	8/2 13:30~15:30	下有住地区公民館
仮説コミュニティ支援 活動に携わる方	8/2 15:30~17:00	下有住地区公民館
一般社団法人 SUMICA 副代表理事	8/3 9:00~ 12:00	まちや世田米駅・交流スペース
住田高校生	8/3 13:30~15:30	住田高校
住田町役場職員	8/4 11:00~12:00	住田町役場

Q.住田町の良いところ・魅力はなんだと思いますか？

世田米まち歩きガイド	世田米の街並み、気仙川＋奥手にそびえる山＋蔵並みが圧巻。夜のライトアップも。
民泊①	安心する
民泊②	ふるさとだから落ち着く。
民泊③	優しい、落ち着く、気仙川と土蔵、山のバランスが素晴らしい
民泊④	自然が自慢。
商店街に住む高齢者	歴史があるから、綺麗にすればどこでも光る。ほっとする。1代前から繋がっているの。
地域おこし協力隊	自然や人の良さ
仮説コミュニティ支援活動に携わる方	田舎育ちの性格の良さ、食材の料理方法を教えてくれる
一般社団法人 SUMICA 副代表理事	出過ぎれば全然認めてもらって打たれなくなる、人が優しい、暖かい、自然がいい、たくさんの人と知り合える、幸せのハードルが低くなりすぐに幸せを感じられるようになる
住田高校生	自然を大切に（木を切ったらまた植える）、緑豊か、治安がいい
住田町役場職員	居心地が良い。上有住の風景が綺麗。人の繋がり。

Q. 住田町について発信したい魅力はなんですか？発信の仕方について思っていることは？

一般社団法人 SUMICA	住田町役場や観光協会、地域おこし協力隊の人もアカウントを作ってやっている。情報が重複するのは住田ファンにとって新鮮さがない。
民泊②	Facebook で民泊の情報について発信している
住田町役場職員	地域おこし協力隊は自然や人の良さを発信したいと言っている。若い人も以外といる。企業も多いので働ける場所もある。これという観光地はないが、「雰囲気」そのものが魅力。上有住の田園風景が綺麗。人の良さ。フェレットストーブ。人の繋がりがしっかりしている。

住田町の魅力について聞いたところ多くの人が人柄の良さ・温かさをあげている。他には世田米地区や商店街の街並み、集落の雰囲気や気仙川などの自然環境をあげる人が多かった。また食材の調理方法を教えてくれたと言った親密さを挙げる人がいた。

もっと発信していきたい物を聞くと、同じく人柄の良さを挙げる人や、若い人もいること、風景、それらを合わせた雰囲気そのものを挙げる人もいた。一方聞いていく中では、自然環境だけでは他の市町村に埋もれてしまう、特に突出した特徴がないなどの回答があった。

3-4. 考察

課題1の旅行者の旅行意識からは、大まかに捉えれば自然や歴史、文化に触れることを目的とする観光客が多いことが分かる。しかし、個人個人のレベルで考えると自然や歴史、文化に触れることによって旅行者自身が受け取りたいものは様々である。文化的なもてなしを受けたいのか、家族や友達とワイワイ楽しみたいのかなど大切にする要素は意識するにせよしないにせよ異なっている。しかし、これらは「豊かな旅行経験者」についての分析であるので、そうではない人たちについては旅行に対して何を大切にするのかは明らかにされておらず、注意する必要がある。

ただ旅行者の、観光への価値観が多様化しており、何とその旅行者にとっての魅力なのかは人それぞれであるということは、観光地が持つ旅行者を惹きつける力も個々人にとっては多様な受け取り方があることを意味し、何をアピールするとどのタイプの人の心がつかめるのか意識すること訪れる人口の増加に寄与するのではないかと考える。

課題2の他地域の成功事例から、コンセプトを明確にしていくことが大事だと思われる。また、市や県などの自治体の側が、住民の意思を無視して一方的に進めてしまうとなかなか成功に結びつきづらいということが推測できる。どの成功事例を見ても、地域住民と話し合い理解を深めていく活動を行っており、それは地域づくりには欠かせないものだと思う。また、民泊のサービス向上のための研修会の開催などの活動をし品質を維持することも重要だとわかる。

課題3で設定した、住田町を観光地として捉えたときに見えてくる現状と課題を考察する。複数のFacebookアカウントで積極的に情報発信を行っていること、住田町役場のHPにも詳しく観光情報が載っていること、そしてポータルサイト、観光サイトにも情報が載っていて情報は探せば多く出てくることがわかった。しかし、どこをどの順で回れば良いのかどの情報がなく、観光客にとってはなかなかこれらを見るだけでは訪れるのは難しいのではないかと考える。これに加え、受け入れ規模の少なさが課題として言われており、それを解決し発信していくことが重要だと思われる。

課題4では、住田町の住民や職員は、もともと住まれている方もそうでない方も、かなり雰囲気や人の良さ、自然の良さに自信を持っていることがわかった。そして、住田町の人々が思う住田町の魅力は、統計的に旅行者が観光地に求める要素と大きく変わっては

らず、住田町そのものが観光客にとっては十分ひきつけられる要素を持っているのではないかと考える。

3-5. 結論

アクセスの不便さを単に不利と捉えるだけではなく、むしろ日常生活から離れたことをしたい旅行者たちにとっては移動すること自体も旅行の楽しみの一つになる可能性があり、ポジティブに捉えることもできるのではないだろうか。

また、民泊の受け入れ規模の拡大や、観光ルートを作りすでにある HP に載せて情報発信すると効果的なのではないだろうか。

さらに、どんな地域として認知されたいのか、どんなイメージを持たれたいのかを明確にすることが、より旅行者の興味を引きつける宣伝をすることにつながるのではないだろうか。また、地域の資源を壊さないように有効に活用し、地域と一体的に、継続的に関係性を高めて活動を行うことが地域の人自身の街に対するイメージを確立することに繋がり、それが自然と住田町そのものの、他の街とはかぶることのない魅力となっていくと考える。

4 章 移住環境整備のあり方：地方への移住・定住促進に求められる住環境整備とは

総合政策学部 2 年 堀江悠希

4-1. テーマ、目的

魅力発信の担い手となる若者の地方への移住・定住促進に必要とされる環境整備とは何かという問いをたて、地方移住の障壁となっている住宅環境整備における課題、またその解決策を明らかにする。移住・定住を促進することにより地域の魅力発信の主体となる人材を確保する。

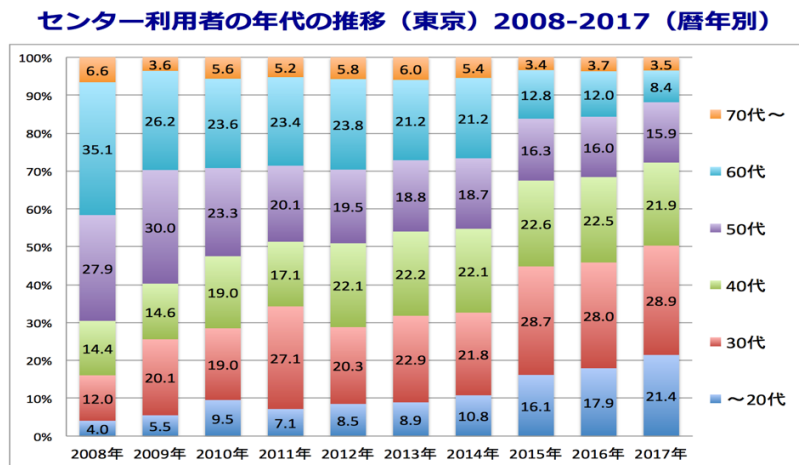
4-2. テーマを取り上げた背景

現在、少子高齢化が深刻化していることは明白であり、少子高齢化に伴い、地域の過疎化も急速に進んでいる。「人口の確保は地域存続の絶対条件であるが、既存住民に対する少子化対策だけでは費用や時間もかかり即効性に乏しい。移住者の確保は人口のみならず、農山村の社会経済にとっても即戦力につながる。¹」（中條 2017）とある。このように住民が少ない上に、高齢化が進む地方で、既存の地域住民たちに対する少子化対策のみでは、効果的な人口増加には繋がりにくく、移住の促進の必要性は明らかである。現在、若者の地方移住希望者は増加しており(表 1)、そういった社会的流行に則った対策が行政、民間ともに求められている。その中でも環境整備に着目する理由は、人口増加した過疎市町村における人口増加要因で一番多かったのは「宅地分譲・公営住宅建設等の住宅整備」となっているからである(表 2)。その上、ヒアリング調査(岩手県住田町:2018 年 8 月 4 日)での「町内の生活で困っていることはありますか?」という質問への回答に「町営住宅の空きがなかったためシェアハウスをしている。単身で引っ越して来た時にすぐ住める場所を作る必要を感じる。」というものがあつた。この回答から住田町への移住者を増やすためにも住宅に関する環境整備が必要であることを知った。また、岩手県住田町の住民交流拠点施設である「まち家世田米駅」を運営する一般社団法人 SUMICA が若者によって運営されているように、若者を呼び込むことが社会経済にとっても即戦力となる。人が生活していく基盤となる「家」や家にまつわる新たな支援策が社会的に必要とされている。

¹ 中條曉仁(静岡大) 「農山村の高齢社会化と田園回帰の可能性」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2017a/0/2017a_100069/_pdf/-char/ja アクセス日 2019 年 1 月 29 日

表1：ふるさと回帰支援センターの利用者数²



² 認定 NPO 法人ふるさと回帰支援センター『2017 移住希望者の動向プレスリリース』
<http://www.furusatokaiki.net/wp/wp-content/uploads/2018/02/db6c900774985e6ae7e38177bfc27ccf.pdf> アクセス日 2019 年 1 月 29 日

2008 年時点では相談者の過半数以上が 50 歳代以上であったが 2013 年以降は 40 歳代未満が 50%を超えていることがわかる。

表2：人口が増加した過疎市町村における人口増加要因³

	1985 - 90 年	90 - 95 年	95 - 2000 年
企業立地、企業誘致による就業の場の拡大	32 (47.1)	47 (42.3)	21 (23.9)
第 1 次産業従事者の定着、増加	9 (13.2)	4 (3.6)	6 (6.8)
地元の創意工夫による活性化施策	7 (10.3)	9 (8.1)	15 (3.6)
宅地分譲、公営住宅建設等の住宅整備	22 (32.4)	70 (63.1)	62 (70.5)
生活環境整備の充実	(項目なし)	22 (19.8)	7 (8.0)
寿命の伸長による自然増加	11 (16.2)	9 (8.1)	3 (3.4)
自然環境等を求めて移住	11 (16.2)	16 (14.4)	9 (10.2)
交通体系等の整備による通勤圏化、ベッドタウン化	14 (20.6)	19 (17.1)	10 (11.4)
学校等公共施設開設による教職員、学生の居住	(項目なし)	9 (8.1)	3 (3.4)
病院、老人ホーム等の医療福祉施設の入院、入居	10 (13.2)	24 (21.6)	22 (25.0)
公共事業等工事関係者の一時的流入	12 (17.6)	25 (22.5)	12 (13.6)
宗教団体の進出	(項目なし)	1 (0.9)	0 (0.0)
その他	12 (17.6)	11 (9.9)	20 (22.7)
合 計	68 団体 140 回答	111 団体 264 回答	88 団体 190 回答

注) 複数回答。構成比は団体数が母数。95-2000 年「地元の創意工夫」15 件 3.6%はママ。回答件数が 15 件で正しいとすると、構成比 17.0% となると思われる。

出所)『過疎白書』平成 6 年版 124 ページ、『過疎対策データブック』平成 13 年版 80 ページより作成。

³ 総務省 「過疎地域の現状、これまでの過疎対策、 過疎地域の課題等について」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/pdf/kasokon19_03_s5.pdf アクセス日 2019 年 1 月 29 日

宅地分譲、公営住宅建設等の住宅整備を全体の 70%が要因としてあげており、重要な人口増加要因であると言える。

4-3. 方法、対象

方法：先行研究の分析

対象：1)地域移住に関する障壁

2)岩手県住田町における地域移住促進と環境整備についての現状

3)他地域の成功例

3つの対象について以下の文献を用いて分析を行う。地方移住に伴う課題を調べ、成功例として5年間で社会増減率3.78%を達成した島根県海士町をあげた。

住田町 『人口ビジョン・総合戦略』 2018

小田切徳美・筒井一伸 『田園回帰の過去・現在・未来 ― 移住者と創る新しい農山村』 農文協 2016

小田切徳美・藤山浩・石橋良治・土屋紀子 『はじまった田園回帰 現場からの報告』 農文協 2015

山中道雄・岩本悠・田中輝美 『未来を変えた島の学校』 岩波書店 2015

藤本信義 藤本信義・楠本侑司・三橋伸夫 (1982) 「田園移住を促進する住環境整備の公的支援策に関する研究」

<https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp1982/19/19suppl/19_19-suppl_115/_pdf/-char/ja>アクセス日 2019年1月29日

溝辺正浩 「田園移住を効果的にサポートする環境整備のあり方に関する調査」 <http://www.jice.or.jp/cms/kokudo/pdf/tech/reports/09/jice_rpt09_05.pdf>アクセス日 2019年1月29日

東海新報 「住宅受給ミスマッチ解消を、『長期計画』・『短期戦略』展開へ/住田町」 <<https://tohkaishimpo.com/2018/02/18/194645/>>アクセス日 2019年1月29日

地方移住を効果的に推進するためには、移住を望む都市の住民が移住を決意し、実践し、定住を継続するまでの流れの中で生じる様々なニーズに応える受入態勢や支援制度などを、受入地域が主体的に進めていくことが重要である。移住に当たっての現状と課題、理想と現実とのギャップは1)移住資金の確保、2)収入の確保、3)住宅の権利形態の選択、4)地域コミュニティへの親和の4つに整理されており、課題の一つに住宅に関する課題があげられていた。

4-4. 結果

① 地域移住にかかる初期費用について

一般的には生活費に対して年間で190万円近くの出費がある。また、地方の移住には車の購入代に安くて80万円、新しい家電の購入を含めた引っ越し代が100万円ほど掛かる。さらに移住してからの生活費に関しては引っ越し後3ヶ月以上の貯金が必要とされる。以

下の表 3 は移住マップ「国内移住に掛かる初期費用や必要な貯金額」を参考に作成した。

表 3：移住に掛かる初期費用や料金⁴

食費	¥30,000	賃貸（全国平均）	¥44,000
ガソリン代	¥10,000	賃貸（全国平均年間）	¥528,000
日用雑貨費	¥10,000		
電気代	¥7,000	住宅（全国平均）	3,843万
電話代	¥7,000		
ガス代	¥5,000		
水道代	¥5,000		
灯油代	¥5,000		
交際費	¥10,000		
教養娯楽費	¥7,000		
雑貨	¥10,000		
小計	¥106,000		
小計（年間）	¥1,272,000		
税金	¥100,000		
国民健康保険料	¥200,000		
自動車の維持費	¥300,000		
合計（年間）	¥1,872,000		

⁴ 移住マップ 「国内移住に掛かる初期費用や必要な貯金額」

<https://www.e10map.com/blog/cost> アクセス日：2019 年 1 月 29 日

移住に掛かる初期費用や料金を算出した結果、賃貸物件を借りることができたと仮定しても年間に生活費が約 240 万円かかる。そのうち、賃貸物件の家賃にかかる費用は 50 万円と全体の 20%以上を占めることがわかった。さらに住宅を購入する場合は、築年数や、地価によって変動するが、全国平均で 3843 万円かかる。地域移住にかかる費用の中でも、住宅における経済的負担は大きいと言える。

② 住田町の現状について

岩手県住田町の人口ビジョンより住田町内の社会人口増減について調べた。

表4：住田町社会増減表⁵

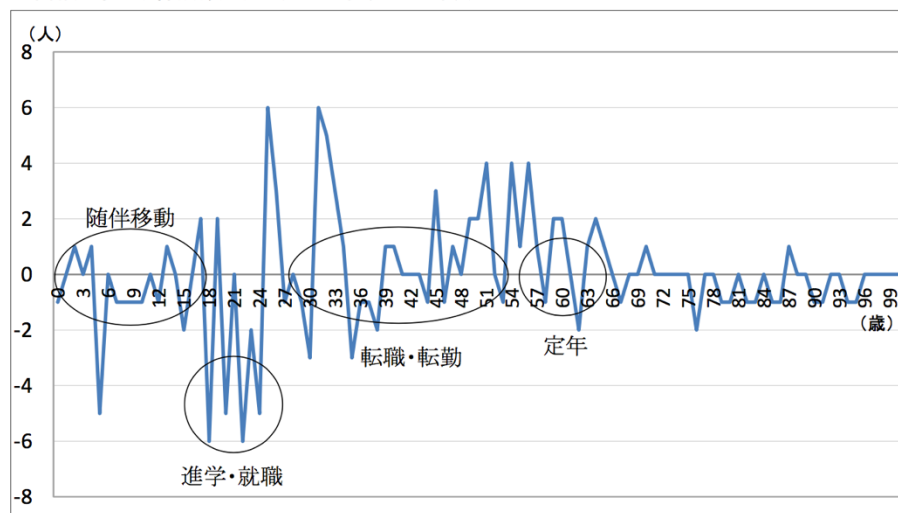
●社会増減

	合計	世田米	大股	下有住	上有住	五葉
転入	206	136	6	28	29	7
	41	23	-5	17	4	2
転出	154	78	5	31	38	2
	-70	-51	-5	-8	-4	-2
その他	-11	-2	0	3	-10	-2
	-9	-1	8	5	-21	0
増減	41	56	1	0	-19	3
	102	73	8	30	-13	4

⁵住田町 『人口ビジョン・総合戦略』 2018

表5：年齢別社会増減表(2014)⁶

○ 年齢別社会増減数（平成26年(2014年)）



〔出典〕町民生活課調べ

⁶住田町 『人口ビジョン・総合戦略』 2018

住田町社会増減については地区による違いはあるが、全体的に増加しつつあることが読み取れる。また、年齢別社会増減においては進学・就職や転職・転勤といった人生の節目の転出が目立つが、転入者の多くは20代後半～30代と40代後半～60代となっていることがわかる。このことから若者の地方移住への関心が高まっていると言える。

次に住田町が行なっている地域移住支援策について調べた。住田町では町営住宅（町内12団地に184戸の町営住宅）の整備や空き家改修、住居斡旋などが図られている。また、新築住宅、移住世帯、民間アパート建設、古民家リノベーション等への行政支援が充

実している。しかし、東海新報²によると空き家バンクの登録数が少ないことが分かった。記事によると、2019年に空き家を探しているという内容の町外在住者からの相談が42件あったのに対し、成約件数は4件であった。また、土地所有者の多くは売却を望むのに対して、移住希望者は賃貸を求める傾向が強い。住宅の供給者と消費者の望む形態に差があると言える。一方、町営住宅に関しては平成27年4月に空きが出た世帯用2戸に対して12件の申し込み、単身用も2戸に対して申し込みが7件となり、どちらも抽選となった。また、町内における民間賃貸住宅の空き家紹介については、ホームページなどでの掲載がなく、さらに、町内には不動産業者がないという。現状では、町営住宅の供給や十分であるとはいえない上に、賃貸物件を借りるには民間同士で話合うしか方法がないため、契約に到達するのは困難である。

③ 成功例―島根県海士町―

H22～27の間に社会増減率3.78%を達成した海士町では地域の資源や人材を活用した地元高校の魅力化が地元生徒への刺激となり、かつ島外の生徒確保にも結びついている。また、海士町が戦略策定などを率先して行うことで、産業振興などによる雇用を創出している。そこで、町営住宅に加えて、定住促進住宅、産業体験住宅、旧NTT社宅のリニューアル住宅もあり、島のIT移住体験ツアーなども行なっている。島根ではIT関連事業者の移住や起業の支援に力を入れており、離島である隠岐の島町でもネット環境さえあれば、IT関連の仕事ができる。地域の特性に合わせた住居の提供が行われているのが成功の要因である。

住環境整備に加えて、隠岐は小野篁や後鳥羽上皇など流刑になった貴族がいる。くわえて江戸時代から外部との交流を様々な形で行っており、そうした歴史的な経緯からも、よそ者に対する拒否感がなく、もてなしの精神を持つ土地柄が醸成されてきたとも言われている。定住政策の総合化については単に産業振興や雇用確保にとどまることなく、定住者に対する住民の受け入れ環境の整備が課題となると考えられる。

4-5. 考察

若者の地方移住への関心が高まっている中で、移住決定における重要な要因である住宅環境の整備によってさらなる移住促進につなげることができる。しかし、移住における初期費用のうち、住宅にかかる費用は負担が大きい。そのため、人気の高い公営住宅は利用応募者が多く、岩手県住田町でも公営住宅の十分な供給がなされているとは言えない。その上、多くの若者は賃貸物件や集合住宅を望んでおり、戸建て住宅が多い中山間地域や山間地域では若者の需要に合致する物件が少ないという現実がある。また、住田町外からの移住希望者の求めるニーズに対応する情報・物件の提供も十分ではない。そのため、住宅情報のネット掲載、多くある空き家の空き家バンクへの登録推進など今ある資産の効果的な活用が必要である。また、住田町では林業が盛んであり、森林資源を活用したペレット

（おがくずなどを圧縮整形した小粒の固形燃料）やバイオマスエネルギーの活用も進んでいる。林業移住体験ツアーといった林業に従事する人々に特化した住宅環境整備も有効な戦略であるとする。

4-6. 結論

岩手県住田町の移住・定住を促進するために、誰でもいいから移住人口を増やすことに重点を置くのではなく、地域住民がどのような人材を求めているのかを明確にすることが重要である。求める人材像を明確化することによって、島根県海士町のようにターゲットを絞った住環境整備ができ、効果的な人口増加につながる。また、住宅環境整備において、若者の需要に合わせて賃貸物件を用意したり、管理できない土地や住居を行政が貸したり、売ったりして有効に活用したりすることが求められる。

処方3～混ぜり合える



5章 祭りのあり方：住田町における祭り・イベントのあり方とは

総合政策学部2年 佐多紀香

5-1. 研究の動機・目的

2018年8月に住田町を訪問した際、商工会役員である60代の男性にインタビューした中で、住田町にとって何が大切か、という質問に対し「祭」と答えられたことが印象に残った。祭といっても、日本全国の市町村に縁日のような規模の祭から、京都の祇園祭や青森のねぶた祭などの大規模な祭まで様々だが、その男性の話を伺う中で、住田町の祭には、伝統を継承すること、人と交流すること、町が一体となることが大切であるように思えた。

住田町には鹿踊や水祝儀といった200年以上続く伝統行事が存在する。一方でKESEN ROCK FESTIVALのような近年発足したイベントも存在する。またこれらの祭よりも小規模なイベントも開かれる。住田町において、各祭・イベントがどのような働きをし、どのような在り方が良いのか、先行研究と資料を元に考察し、住田町の祭・イベントの在り方を考える。

5-2. 先行研究

祭・イベントについて考えるにあたって、そのイベントがどのように運営されているのかを知る必要がある。以下の1と2の先行研究はいずれも地域で行われる縁日的な祭について研究したものである。3はここ20年で誕生したロックフェスティバルについて言及したものである。住田町では毎年夏に「KESEN ROCK FESTIVAL」という野外音楽フェスが開催されることよりこの研究を選んだ。

①岡 絵理子（2003）「市街化と祭 兵庫県三田市を事例に」

大阪大学 都市環境デザインセミナー2003年 第3回記録 「祭とコミュニティ」,

<<http://www.gakugei-pub.jp/judi/semina/s0304/mat014.htm>>2018年12月アクセス

この研究では、兵庫県三田（さんだ）市の貴志地区にある「貴志御霊神社の秋祭り」と、その他4つの農村地区の祭の参加者と周辺居住者を対象にアンケート調査を行った。ここではその地域で生まれ育ち、その地域の神（氏神）を信仰する者を「氏子（うじこ）」と呼ぶ。また「参加者」とは祭の費用の収集・露店の販売、神輿を担ぐなどして祭に直接関わっている人のことである。

まず参加者の世代や男女比などについて、祭に参加しているのは子供から大人までの男性であるため女性はほとんどおらず、全体的に退職した年配の男性が多いことがわかった。また参加者の8割は氏子であった。次に子供の頃の「祭」経験に関して、参加者と不参加の周辺の居住者を比べ、参加者の方が幼い頃から祭に参加している割合が高いことがわかった。参加者にかかわらず、日本人の8割以上は幼い頃に祭に行った入り参加したりした

経験があることも判明した。また、祭りへの参加に対する意識についての参加者限定のアンケートの結果より、年配の男性にとって祭は義務的なものであるのに対し、若者の参加者は自主的に参加している場合が多いことが判明した。

これらの結果から筆者は、年配の男性にとって祭りは戦後のムラ社会における男性の役割を果たすという義務的なものであったと考えられ、また彼らは地域の付き合いをより重んじており、それに対し若者は祭りの雰囲気や娯楽性を求めて主体的に参加していると考えられる、とした。

②中嶋小代子（2011）「地域社会と祭り-祭りの社会的機能の研究-」駒澤大学文学部社会学科社会学専攻 卒業論文9，〈<http://tsuboi.secret.jp/sotsuron21/09.pdf>〉2018年12月アクセス

この研究で筆者は、東京都西東京市田無本町の団地を対象とした祭と地域コミュニティの意識の関係に関する調査を行った。この調査を通して以下のことが述べられている。まず、祭への準備期間中には参加者同士でのコミュニケーションが増えている。そこで筆者は、同じ目的に作業するということは人々が距離を縮めるのに効果的であり、普段あまり近隣との交流がない男性にとっては貴重な機会になる、と考察している。また、年代が異なる人同士でのコミュニケーションも今後の地域生活における関係の構築になるであろうとしている。参加者の様子から、毎年参加している人が大半を占めていることがわかった。そこでは皆祭に向けて集まることを楽しんでいる様子が見受けられた。この祭では子供は太鼓を披露するのだが、練習の様子より筆者は、子供同士で集まる機会が減ってしまった現代にみんなで集まって祭の太鼓を練習する機会が与えられることが子供達の交流を促す良いことである、と述べている。盆踊りの練習の様子について、様々な世代の人が何気ない会話をすることで楽しんでいる一方、若い世代が少ないことより、年配の人は地域との関わりを大切にしようとする一方で、若い世代は自分の生活にこもりがちであるのではないかと考察している。

団地の住民を対象では「住民が地域に対してどのように感じているか」についてのアンケート調査では、住んでいる地域に愛着を感じている人ほど、より地域生活を良くしようとして和を大切にし、また愛着を感じるほどより住みやすくなるように心がけているという結果が出た。反対に祭がなくても良いと考えている人ほど、近所づきあいをできればしたくないと考えていることも判明した。「祭がない方が良い」と考えている人たちの理由の中には、長年祭を運営している会長たちが自分たちの都合で決まった人に頼んでしまい、新しく来た人が参加しづらいというものがある。最後に、地域住民同士の交流が希薄化している現代で交流の機会を作るためには自治会や老人会などの集まりが祭を開くことが効果的であるとした。

③大島里美（2009）『「IV. デジタル化の影響(2)-ライブの復興（リアル価値の高まり）」音

楽産業構造の変化によるアーティスト自立および地域再生の可能性』 大阪市立大学大学院創造都市研究科<<http://kiyo.info.gscc.osaka-cu.ac.jp/ejcc/article/viewFile/148/126>>2019年1月アクセス

従来の伝統的な祭や縁日とは異なり、この章で筆者は、ここ20年以内に誕生した地方で開催されるロックフェスについて言及している。「日本におけるコンサート入場者数の推移」(社会法人全国コンサートツアー事業者協会資料)のデータから1991年から2006年にかけてのコンサート入場者数は1997年に一度最低数を記録したものの、翌年から2006年にかけて急上昇していることがわかった。このことより、人々がただ音楽を聞くだけでなく、ライブで聞くことを求めるようになったとしている。また、都心のように騒音の心配が少ない地方でのフェスに行く人が増えたのではないかと考察している。1997年に日本初のロックフェス「フジ・ロックフェスティバル」が開催され、その成功に続き日本各地でロックフェスティバルが開催されるようになった。また、何度も開催されることで主催者も参加客も慣れ、暑さ対策やトラブル対策を行うようになった。筆者は「ファンの行動が『近くにアーティストが来るから見に行く』というものから、『たとえ遠くても、見たいライブには泊りがけになっても見に行く』という意識に変化していることを表しており、人々にとってのライブの価値が上昇していることをも意味しているといえるであろう」としている。

5-3. 先行研究に対する考察

①岡 絵理子『市街化と祭 兵庫県三田市を事例に』について以下のように考察する。

祭は戦後数十年の間にその地域の人々の間で儀式的に行われる義務的なものから誰でも参加できる自由なイベントになった、とあることより、年配の男性の参加者たちにとって祭は、戦後の義務的なものとして位置づけられていた時のイメージが残っているのではないかと思われる。しかしそれは決して嫌悪するものではなく、むしろ彼らにとって祭はやりがいであり、地域の付き合いを確かめるためのイベントとなっている。また祭は若い世代にとって、日々の仕事から離れて日常と異なる楽しみを享受する場であり、別の地域からの参加者にとっては異なる地域の人と交流する場ともなっている。年代によって祭に対する思いは異なるが、参加することで既存のコミュニティを確認したり、新しいコミュニティを作るなどしたりし、やりがいを生んでいると思われる。

②中嶋小代子『地域社会と祭り-祭りの社会的機能の研究-』については以下のように考察する。

団地で開催される祭を対象にしたこの研究の調査結果より、祭を通して地域住民が交流する機会が与えられる一方で、参加したくてもできない人が存在していることが判明した。これは高度経済成長の際に郊外に建てられた団地に当初から住んでいる住民が現在参加者を決める権力を持っており、彼らが参加者を慣習で選んでしまっていることによると思わ

れる。祭の参加者は年配の方や小学生などの比較的時間に余裕のある世代が中心となっていることより、現役の会社員たちは休日に開催される祭に客として参加することはできるが、たとえ参加の意欲があったとしてもそれまでに行われる準備に参加することは困難であろうと考えた。またその団地で数十年にわたって構築された既存のコミュニティの中に自ら参入していくことは容易なことではない、とも思われる。

③大島里美『音楽産業構造の変化によるアーティスト自立および地域再生の可能性』については以下のように考察する。

この論文が書かれてから約10年が経過しているため人々の音楽の楽しみ方も変化したと思われる。この10年で新たなロックフェスティバルも開催されるようになり、夏になると毎日のようにメディアで紹介されている。参加者は音楽を楽しむことのほかに、都会では味わえない広大な自然、ライブ会場内で催されているフードエリアの食べ物などもフェスの楽しみの要素となっている。また1組のアーティストだけでなく様々なアーティストの曲を聴くことができる。持参したペンライトやタオルを振り回して盛り上がることで日々のストレスのはけ口としても機能すると思われる。開催される会場周辺の住人だけでなく、都心部に住む人々にとっても非日常的な空間でストレスを発散することができるのではないだろうか。

5-4. 住田町の祭・イベント

まずは、地域で開催される小規模なイベントについて見ていく。住田町では「小さな拠点づくり」という制度が実施されている。これは各地区の協議会が、地域でのイベント企画を役場に申請すると補助金が支給されるというものである。申請までの流れは、住民から集落支援員や地域おこし協力隊にその地域の課題を報告し、その課題の解決に向けて社会福祉協議会や役場・邑サポートが対策を地域共同組織に提案する、といったものである。（邑サポートとは、住田町における仮設住宅のコミュニティ支援を行う団体である。）このような地域イベントには国より地方交付金が支給され、使い切らない場合には来年度に繰り越して使うことも可能である。他にもそれらの地域イベントで発生した利益も予算として使うことができる。

以下は実際に開催された住田町の地域イベントの一部である。

イベント名	団体	部
公園整備清掃	せたまいいきいきづくり	ふれあい部会
あいさつ運動推進	せたまいいきいきづくり	ふれあい部会
地域の達人に学ぶ	せたまいいきいきづくり	いきいき部会
地域の見どころマップの作成	「スマイルおおまた」 おおまた地区振興協議会	
遊休農地でのそばの栽培	下有住いきいき活動協議会	
各自治公民館間でのそば打ちと食事	下有住いきいき活動協議会	
クップ大会	下有住いきいき活動協議会	
夕涼み会	下有住いきいき活動協議会	
収穫祭	下有住いきいき活動協議会	
下有住を語る会	下有住いきいき活動協議会	
「たまげたね！上有住」地域内ツアー	上有住地区計画推進協議会	にぎわい部会
史跡・景勝地の環境整備	上有住地区計画推進協議会	楽しみ部会
桜並木の草刈り作業	五葉地域づくり委員会	
盆踊り大会	五葉地域づくり委員会	
ミニ運動会	五葉地域づくり委員会	

平成 30 年度版 住田町企画財政課「住田町の『小さな拠点づくり』」の資料を参照し、作成したもの

ここでは主に地域住民が参加する地域イベントを載せている。このような地域イベントから新たなイベントが生まれる場合もある。たとえば、下有住地区においては「下有住を語る会」という集まりがあり、そこでクップ大会の開催の提案が出たことで実際に大会を開くこととなった。また同地区において遊休農地を利用したそばの栽培が行われた。栽培やそば打ち道具の購入で予算を使うが、そばを用いた商品開発を進めていけばそこから新たな収益を得ることも可能である。これらのイベントは実行する場合もあれば、その年度には実行せず計画した年度の翌年度に実行する場合などもある。翌年度に向けた申請書には昨年実行したイベントの会計報告やイベントの参加者についての様子なども記されており、審査する側にとっても地域の振興に貢献しているかがわかるようになっている。

上記のイベントは地区ごとに行われるものであるが、次は町全体、もしくはより規模が大きいイベントについて考えてみる。

まずは、伝統的なイベントについて見てみる。ここでは岩手県の各地で行われている「鹿踊（ししおどり）」を例に考える。鹿踊は住田町でも行われている伝統行事である。鹿踊という行事にはその起源が諸説あり、少なくとも 200 年以上前には存在していたとされる。岩手県内だけでも約 150 種類の鹿踊があり、その中にはすでに廃絶したものもある。¹ここでは踊り手たちは「鹿頭」というお面を被り、背中に「ササラ」と呼ばれる長さ約 3 メートルの竹に白い紙を巻いたものを背負い、太鼓を叩きながら踊る。またその名の通り、鹿の角を頭につける。（キャノンマーケティングジャパン株式会社 「東北 STANDARD 岩

手県盛岡市 『怪獣的な、鹿踊の装束』) 鹿踊については宮沢賢治も「鹿踊りのはじまり」という作品で描いている。

東北 STANDARD というサイトにて、公益社団法人全日本郷土芸能協会事務局次長の小岩秀太郎氏に酔えと、鹿踊は必ずお盆の時期に行われるものであり、以前はその地域の鹿踊をイベントなどで別の地域で行なったり、異なる時期に行なったりすることさえ禁止されていたそう。また鹿踊の目的は諸説あるが、主な目的は供養であり、山で獲った獣を供養することから、次第に亡くなった人間の供養や豊作祈願といった別の目的も付随するようになったそう。

鹿踊に関するインタビューにて彼の思い出や郷土芸能について以下のように語っている。小岩氏は小学校の行事で地元岩手県一関市の舞川鹿躍を教わったことで鹿踊に興味を持ち、中学生になり 15 キロもある本物の衣装を実際に着て踊ることで、彼の鹿踊に対する興味は増し、また師匠の意志を伝承しなければならないと思い始めるようになった。

初めは見た目やかっこよさに魅力を感じていたが、成人し鹿踊を続けていくに連れて、その土地にしかない数百年続いている踊りを技術が発展した今の時代に生きる彼にやりたいと思わせていることに魅力を感じるようになった。また彼は郷土芸能がその土地にしかないものであることをその土地の人たちが再発見する機会を作りたいと考えており、異文化交流が増えた現代においてもその土地の伝統を残し、真髄を求められるようにしたい。そのために必要な情報を交換したり、文化において困難に感じる部分を共有し相談する手伝いをしたりすることで、郷土芸能に興味がない人にもその良さを伝えていきたい。

次に 20 年以内に発足したイベント について見てみる。ここでは毎年 7 月に種山ヶ原高原行われる「KESEN ROCK FESTIVAL」を例に見てみる。このイベントは 2009 年より開催されており、2011 年の震災の年を除いて翌年より毎年開催されている。公式サイト²での委員長のコメントより、このイベントがきっかけで地元に戻った人や住田町を知った人もいることがわかる。手作りであるこのイベントは、開催して数年間は小規模なものであったが、実行員の努力によって毎年人気のイベントになった。

¹ 「いわての主な鹿踊一覧」いわての文化情報大事典（最終閲覧日 2019 年 1 月 24 日）

<http://www.bunka.pref.iwate.jp/dentou/kyodo/list/sisi.html>

² KESSEN ROCK FESTIVAL<<http://kesenrockfes.com/>>（最終閲覧日 2019 年 1 月 28 日）

5-5. 考察

まず縁日的な祭について、先行研究 1、2 の調査より、住民との関わりを持つ機会が少ない現役の世代は、住田町の KESSEN ROCK FESTIVAL や鹿踊を継承する団体のように、同じ趣味を持った人同士で繋がれるようなイベントであれば、比較的気軽に参加することができるのではないだろうか。また、若い世代の参加者は自ら参加を申し出るよりも主催者側から勧めてみたり、新たに参加する場合は複数の同年代の人と一緒に参加してみたりするのも良いのではないだろうか。

5-6. 結論

先行研究からもわかるように、祭というのは常に人との交流が密接に関わっている。

5-7. 参考文献

大島里美 (2009) 『「IV. デジタル化の影響(2)-ライブの復興 (リアル価値の高まり)」音楽産業構造の変化によるアーティスト自立および地域再生の可能性』 大阪市立大学大学院創造都市研究科, <<http://kiyo.info.gsec.osaka-cu.ac.jp/ejcc/article/viewFile/148/126>> 2019 年 1 月アクセス

岡絵理子 (2003) 「市街化と祭 兵庫県三田市を事例に」 大阪大学 都市環境デザインセミナー2003 年 第 3 回記録 『祭とコミュニティ』, <<http://www.gakugei-pub.jp/judi/semina/s0304/mat014.htm>>2018 年 12 月アクセス

中嶋小代子 (2011) 「地域社会と祭り-祭りの社会的機能の研究-」 駒澤大学文学部社会学科社会学専攻 卒業論文 9 , <<http://tsuboi.secret.jp/sotsuron21/09.pdf>>2018 年 12 月アクセス

5-8. 参考サイト

<住田町総合情報>

住田町観光協会 Facebook

<<https://www.facebook.com/sumitakankokyokai/?pageid=376907472407311&ftentid=1943864602378249&padding=0>>

すみっこの部屋 facebook

<<https://www.facebook.com/sumita.character/>>

<住田町伝統的な祭>

「郷土芸能」いわての文化情報大事典 (最終閲覧日 2019 年 1 月 28 日)

<<http://www.bunka.pref.iwate.jp/dentou/kyodo/>>

SANFES, 2015 年< <https://sanfes.com/2015/>>

「いわての主な鹿踊一覧」いわての文化情報大事典 (最終閲覧日 2019 年 1 月 24 日)

<http://www.bunka.pref.iwate.jp/dentou/kyodo/list/sisi.html>

「小岩少年、鹿踊と出会う (1-3)」キャノンマーケティングジャパン 東北スタンダード (最終閲覧日 2019 年 1 月 24 日)

<http://tohoku-standard.jp/standard/iwate/shishiodori/01/>

6章 コミュニティ施設のあり方：人を呼び込むコミュニティ施設とは一まちや世田米駅を参考にして

総合政策学部2年 丸田彩夏

6-1. 研究動機

住田町の人口は以下図 1-1 のように年々減少しており、高齢化も進んでいる。住田町人口ビジョンによると人口の減少は表 1-1 のような弊害をもたらすことが考えられている。そしてこの弊害によって益々、外部からの人材を呼び込めず地域が衰退するという悪循環に陥ってしまう。その為、町をより良い環境にしていくためにも、住田町に人を呼び込み、活性化させることは急務であると言える。活性化を図るためには、外部から訪れる人間の力が不可欠であり、現在地方自治体が注目しているのがコミュニティデザインだ。コミュニティデザインとは人との繋がりや仕組みを作ることを指す。コミュニティデザインの歴史は古く、第1次から第3次までの3つに分けられる。第一次コミュニティデザインは特定の地区の物理的な空間にどのような施設や住宅や道路を、どのように計画的に配置するかの技法のことを主に指し、第二次コミュニティデザインではコミュニティ（地域住民たち）によってデザインされる公共施設のことを主としていた。そして現在のコミュニティデザインは第三次世代に入り、従来のハード面を重視するものではなく、「外部との関係性への配慮」が重視されている。これは地域住民だけでなく外部の人間が足を運びやすい空間を作ること、住民同士の情報交換の場になったり、住民に新たな刺激が加わる可能性も生まれたり、コミュニティに来ることを目的とすることで、地区全体への関心を生み出すきっかけを作るというものだ。

以上の点から、住田町の新たな魅力発見・活性化にはコミュニティデザインが不可欠であると考えると同時に、住田町の人口増加につながるような人を呼び込めるコミュニティ施設がどのようなものであるかを考えたい。

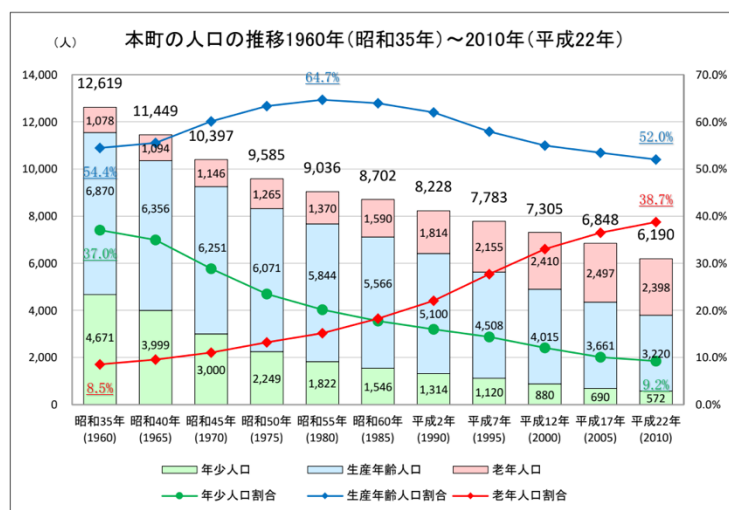


図 1-1：住田町の人口推移（出典：総務省）

表 1-1：人口減少に伴い発生する諸課題（出典：住田町人口ビジョン）

1. 日常的なサービスの提供が身の回りから減少し、それによって生活が不便になり、更なる人口減少につながるおそれがあります。
2. 生産年齢人口の減少に伴い各産業における労働力の不足や、それに伴う生産量（生産高）の低下が起こるおそれがあります。
3. 医療、福祉、介護については、当面の間、後期高齢者の増加に伴う需要の増加が、特に大都市においても同様に増加すると見込まれることから、専門人材が町外に流出するおそれがあります。
4. 児童生徒の減少により、学校教育や地域の文化継承への影響が懸念されます。
5. 公共交通機関は、利用者の減少に伴う経営上の影響が見込まれる一方、高齢化率の増加により必要性が高まると見込まれます。
6. 過疎化と高齢化の進行により、地域コミュニティの持つ共助機能の低下が懸念され補完の必要性が高まります。
7. 町の財政は人口減少により税収減となる一方、高齢化の進行による社会保障関係経費の増加などにより一層の硬直化が懸念されます。

6-2. 調査方法

①ヒアリング調査

本研究を行うにあたり住田町住民に対し、ヒアリングを実施した。ヒアリングの概要は以下の通りである。

ヒアリング概要

実施期間：2018年8月1日～8月4日

対象：住田町住民

目的：地域コミュニティ・外部移住者に対する住民意見の明確化

質問項目：i 地域コミュニティについて

- ・何か地域が主体になっている団体をご存じですか？
- ・同世代と関わる機会がありますか？
- ・若者と関わる機会がありますか？

ii 外来者・移住者について

- ・実際、若者が地方に戻ってくる、訪れることについてどう思いますか？

②先行事例の調査

本研究を行うにあたり複数のコミュニティ施設をピックアップし、調査を行なった。選考基準を以下に示す。

- ・コミュニティとしての役割を担っていること
- ・所在地が東北地方であること
- ・継続して活動を行なっていること
- ・外部者の利用が多いもの

6-3. 調査結果

①ヒアリング調査

住田町住民へのヒアリング調査での質問内容は主に、参加している・認知している団体、他者との関わりを尋ねた「地域コミュニティ」に関する項目と、移住者や来訪者について尋ねた「外来者」に関する項目の2つの項目に分けて調査している。その調査結果をまとめたものが以下の表2である。

ヒアリング結果のまとめ（主要部分の抜粋）				
ヒアリング対象	地域コミュニティ	若者との関わり	同世代との関わり	外来者について
民泊受け入れAさん		近隣に子供が住んでいないので、緊急子供の家の働きをなしていない。小中高学生と関わる機会もない	年1回同窓会を行う(39会) 前町長さんを招いてご飯 サウナ	若い人が来てくれるのは、楽しい経験
民泊受け入れFさん	地域おこし協力隊、SUMICA等。	民泊利用者	某協会	もちろんうれしい。もっと民泊に来てほしいと思っている。
世田米ガイドBさん		ガイドの対象者の街の保育園や小中高の先生、ふれあい塾など。	毎月火曜日に行う「月例会」で、ガイド場所の体験、情報共有	
商店街C夫妻	まちや町屋の隣のカフェ	話し相手がいるとうれしい コミュニティーを作る場がもっとあったら(まちやは、若い人・インターネットを使う人が行くところだから行きづらい)。	折り紙教室	若い人が増えることはとても良いこと
役場職員Dさん				住民の中にはウェルカムじゃない人もいる。 役場としてはきて欲しい。
高校生Eさん			部活・学校	

表2：ヒアリング結果のまとめ

本調査では、ヒアリング調査を行なった住田町住民の全員が外部者に対して好意的であることが確認できた。また、同世代との関わりが充実している一方で他の世代との交流の機会にあまり恵まれていないということも確認できた。

以上の結果から、住田町内では外部者と地元民とが交流できるコミュニティ・異世代間交流が行なえるコミュニティにニーズがあるのではないかと考え、またそれが行なえる施設に人は集まるのではないかと考えた。

②先行事例の調査

以下の表1は選考基準を基に選んだ先行事例とまちや世田米駅との比較を表にまとめたものである。

表1：まちや世田米駅と先行事例との比較

	まちや世田米駅	盛岡街並み塾	でるそーれ	りくカフェ
設立年/所在地	2016年/岩手県気仙郡	2017年/岩手県盛岡市	2010年/青森県五所川原市	2012年/岩手県陸前高田市
運営主体	一般社団法人SUMICA	特定非営利活動法人盛岡まち並み塾	企業組合でる・そーれ	住民
運営目的	「すみたをツナグ」をテーマに住田町を盛り上げる	地元民と歴史的まち並み・建造物を保存・活用する 観光振興	地元産の食材を使用することで生産者と消費者をつなぐ	地元住民の健康と生きがい作り。 地元住民と外部者の交流の場を
スタッフの形態	給与有り	給与有り	給与有り	給与有り
SNS発信状況	Twitter・Facebook・HP（約2日に1回更新）	Facebook・HP・スタッフブログ（最低1ヶ月1回更新）	Twitter・Facebook・HP（最低1ヶ月1回更新）	Instagram・Facebook・HP（最低1週間1回更新）
備考	歴史的建造物をリノベーション（古民家） 住民交流拠点施設。カフェ以外にもレストランやギャラリーあり 外部から招いた講師のセミナーなどもある	貸し出しスペースとして町家利用可能 開催イベントの形態が幅広い	鉄道ファン（外部者）も訪れる 地元学生のインターンも受け入れる ツアー企画など観光方面にも力を入れる	建設時に企業や大学などからの出資あり 貸し出しスペースとして施設利用可能 不定期開催のイベントあり

上の表から4つのコミュニティ施設の類似点は以下の三つの点であると考えた。

- ・頻繁に活動が行われており、それを随時、SNSを利用して発信している
- ・スタッフをボランティアではなく社員やパートとして雇っている
- ・地元住民だけではなく、外部者も楽しめる工夫がされている

以上の結果から、外部者を呼び込むために必要な条件は情報配信率が高いこと、活動内容の幅が広いこと、その地域特有の催し・商品の提供があることだと考えられる。また、スタッフをボランティアではなく有償スタッフにすることで、全員に質の高いコミュニティ作りへの責任感を与える効果があるのと同時に、やりがいだけではなくスタッフ自身が楽しんで活動を行うことができるのではないかと考えた。

6-4. 考察

以上の調査から、本研究で得られた人を呼び込むコミュニティ施設の経営に必要な条件を以下にまとめる。

第一に、「定期的に施設の情報発信を行うこと」が挙げられる。情報配信率が高いことはその分他者の目に留まる可能性の向上にも繋がり、更には随時情報を確認するためにサイトやアカウントをお気に入り・フォローしてもらうことも期待できるだろう。また、常に最新の情報が流れることによって訪れる前から施設の雰囲気を知ることができ、閲覧者に対しクリーンなイメージを与える効果があると考えられる。

第二に、「活動内容に幅があること」が挙げられる。一つの分野に縛られず様々な企画を行うことで、多様なニーズに答えることができ利用者を増やすことに繋がるだろう。また、イベント内容を定期的に変えていくことで新たな利用者だけではなく、リピーター獲得も期待できるのではないだろうか。

次に、「地域特有の催し・商品の提供があること」が挙げられる。これは主に地域外の人々を呼び込むのに必要な条件だと考えられる。地域のコミュニティ施設を外部者が利用

する目的は、施設として利用することと同時に、地域住民との交流を通じて地域の希少価値を見出すことではないかと考えられる。その目的を達成するためにも地域のオリジナリティに注目したイベントや商品開発は不可欠な要素だといえるだろう。

最後に、「スタッフ自身が楽しんで活動を行なっていること」を挙げた。現場のスタッフが楽しんでコミュニティ運営を行うことで、その場の雰囲気をよくするだけでなくコミュニティ自体の質を高め人々が利用したいコミュニティにしていくことが期待できる。また、コミュニティ自体を継続して運営するためにもスタッフの仕事に対する充実度が重要であることが先行研究で証明されている。

以上が本研究で考察された人を呼び込むために必要だと考えられるコミュニティ施設の条件である。

更にヒアリング調査の結果から、今住田町の住民が必要としているコミュニティが外部者や異世代との交流の場であることが読み取れた。まちや世田米駅で働くスタッフは町外からの移住者かつ若者が主である。住田町住民が求めるコミュニティへのニーズに応えられているからこそ、町内での認知度も高く賑わいのあるコミュニティ施設になったのではないだろうか。

6-5. 参考資料

まちや世田米駅ホームページ< <http://machiya-sumita.iwate.jp>>

りくカフェホームページ<<http://rikucafe.jp>>

コミュニティカフェ でる・そーれホームページ<<https://www.delsole-aomori.jp>>

特定非営利活動法人盛岡街並み塾ホームページ<<https://www.machinamijuku.org>>

今瀬和哉・松行美帆子（2015）『コミュニティカフェの継続に必要な条件についての一考察—横浜市・川崎市のコミュニティカフェを事例として—』

住田町人口ビジョン

小池初奈『現代における新たなコミュニティの形とは—ゆるやかなつながりをもとめて—』

処方 4～共につくる



7 章 地域の魅力の共有：地域住民が魅力に気づくまちづくりとは

総合政策学部2年 雨宮ゆうか

・学芸学部2年 森崎瑞季

7-1. 目的と背景

この報告は地域の魅力について住民が魅力に気づくまちづくりとはどのようなものか明らかにすることを目的とする。

自分の住む街についての魅力を知ることができることは、自分の住む街に自信を持つことができることであり、同時にその自信は外へ自分の街の魅力を伝えることを可能にするのではないかと。また、自分の街が誇れるということは気持ちよく住み続けたいという意思が生まれることにもつながるのではないかと考えたからである。

また、自分の住む街に魅力を感じられることの重要性は極めて重要なことである。なぜならば、自分の住む街を誇れることは気持ちよくその街に住み続けたいという意思の創造につながり、さらにそれは定住者数の維持に重要な事項であるからだ。また、自分の街を誇れることは（町外住民にもその魅力を発信することで）移住者を増やす効果を得られる可能性を持つ。これらは地域過疎化問題の解消においても考えられるべき問題であり、社会的に深く掘り下げる意味がある課題である。

7-2. 先行研究

観光や町づくりに関した魅力についての先行研究は多く存在するが、地域住民自身がその地域に関してどのように感じ、考えているかについての先行研究がない。

今回は外から移住した人に関する文献から、外からきた人が魅力に感じやすいことに傾向があるのかを探る。さらに、まちづくりの定義について考察がなされている文献から、その定義と課題について探る。

参考文献

① 大橋 幸子・湯原 麻子・神永 希（2011）「地方部への移住者の意識にみる 地域の魅力に関する調査」

この研究は、人口の規模の大きい都市から地方部に移住した人を対象に行われた。研究結果から地方部の物的資源の享受、地方部の物的資源の活用、地方部の人的資源への貢献・帰属を実現できる環境が、地域の魅力になっていること、人づきあいに関する魅力については、地域によらず移住当初は移住者、地元住民のそれぞれの面から壁があるものの、多くの移住者がその壁を越え、人の温かさを感じていることが明らかになったと大橋らは分析している。

② 杉山,天心（2015）「住民の地域認識と『まちづくり』活動：旧京北町を事例として」

この研究は、「まちづくり」活動がなぜ連帯しないのかという問題意識を持ち、住民の地域認識と、それが「まちづくり」にどのような影響を与えているかを明らかにするための分析がなされている。研究結果から、地域認識の相違、詳しくは地域の範囲の捉え方の相違や、世代による生活の捉え方の違い、世代によるつながりの捉え方の違いはまちづくり活動に影響を及ぼしているということが明らかになった。さらに、まちづくり活動の連帯に向けては地域性の共有が課題であると杉山らは分析している。

③ 渡辺俊一（2011）『『まちづくり定義』の論理構造』

この研究では、様々なまちづくりの定義について述べられている。多様な「まちづくり定義」を体系的に整理する方法として「次元」と「広義・狭義」の概念を用いて「まちづくり定義」を構造化することが可能であると渡辺は分析している。また、「広義のまちづくり」は住民主体の「地域を魅力あるものにしていく諸活動（福祉・環境等の分野を含む）」であり、その建設分野における場合が「狭義のまちづくり」となることも明らかにされている。

7-3. 方法

①調査方法

住田町住民（移住者を含む）、またその近隣住民の方にヒアリング調査を実施した。

②調査対象

調査対象は住田町住民（移住者を含む）、またその近隣住民の方とした。

③調査時期

調査は2018年8月1日～4日にかけて行った。

7-4. 結果

①魅力についてのヒアリング結果

以下に住田町の魅力についてのヒアリング調査結果の表を示す。

質問内容：住田町の魅力はどのようなところか。

表1 住田町の魅力についてのヒアリング調査結果の表

対象者	対象者の職業	魅力に感じていること
民泊先経営者	農業	静かなところ、空気や水が綺麗で安全なところ。頑丈に作られた家。美味しい川魚がいるところ。レジャーが充実しているところ。
公民館長	公民館長	森林業日本一で豊かで恵まれた自然があるところ。
仮設コミュニティ 代表	復興支援	人材の宝庫である町であるところ。人の暖かさ。生きる技術を持った町であるところ。
地域おこし協力隊	地域おこし協力隊	家族のような雰囲気があるところ。アウトドアに適しているところ。
SUMICA	SUMICA	外の人を受け入れる雰囲気。やりたいことにチャレンジする機会がたくさんあるところ。人の優しさや暖かさ。森林浴ができるところ。伝統的な蔵並み。
住田町役場職員	役場職員	緑や雰囲気、豊かな自然、居心地がいい場所であるところ。

対象者：地域おこし協力隊の方、住田町役場職員の方

質問内容：地域の魅力を PR するために行なっている活動は何か。

また方法や活動に際しての心がけは何か。

もっと発信したい住田の魅力はどんなところか。

表2 住田町 PR 方法についてのヒアリング結果（地域おこし協力隊）

方法	活動
facebook, すみたっち（webページ）	個々に魅力を持つ人や団体の活動を紹介 子供から大人まで楽しめる地区行事を開催 例）蕎麦の栽培から収穫、販売まで
アウトドア体験（イベント）	ハンモック体験、スラックライン、 トレイルランニング、燻製体験など

地域おこし協力隊

活動に際しての心がけ、目的
魅力発信やPRのためのみならず、地域と外のつながり、地域の価値を一つずつ高めて行くことが必要 観光に力を入れて地域をおろそかにするのではなく（観光地を目指すのではなく）、地域を盛り上げ 楽しいところを見てきてくれる人が増えればいいと思って活動している。 またこのような活動に共感してくれる人を増やし、ここに住んでよかったと思ってもらえるような活動を目指している。

表3 住田町 PR 方法についてのヒアリング結果（住田町役場）

方法	活動
すみた大好き大使	現在 5 9 名で活動中 イベントやツアーの計画を行う。 名刺の配布などでも住田町をPR

住田町役場

もっと発信したい住田の魅力
上下関係なく自然体でいられるところ、実は若い人や企業が多いところ、スポーツ、住田高校について、ペレットストーブの普及、林業について、何も無いところ

表には記載がないが、もっと発信したい住田の魅力を伺う際に移住者は人に憧れるから、町民が自分の町に自信を持つことが大切という興味深い回答を得ることができた。

②その他のヒアリング結果

対象者：地域おこし協力隊の方

質問内容：

- I. 地域おこし協力隊の活動の難点はどのようなものか。
- II. 地域おこし協力隊として活動していて、どのようなところとつながりを持ったか。

回答内容：

I. 地域のことを外に発信することが仕事だと思っていたが、地域と外とのつながり、地域の価値を一つずつ高めていくことが必要と考えている。

II. 現在は他にないものを作る、つまり外と繋がるためのもの、自分たちの持っている珍しいものを作っている段階であるので、まだ外から人が来ている実感はない。高齢者への魅力発信については人がいないなりにできることを考えている。必要ないと考えていない人には関わらない。（付き合いたくない人はもともと来ないから。）まずは自らが楽しんで地域を盛り上げようとしている。

また、町内、町外の人が感じている魅力の違いをPRしていこうとしている。住民が当たり前に感じている（＝特段魅力とは思っていないこと）家族のような街の雰囲気や町外からきた人は魅力だと捉えていること。

③ 住田町住民アンケート結果

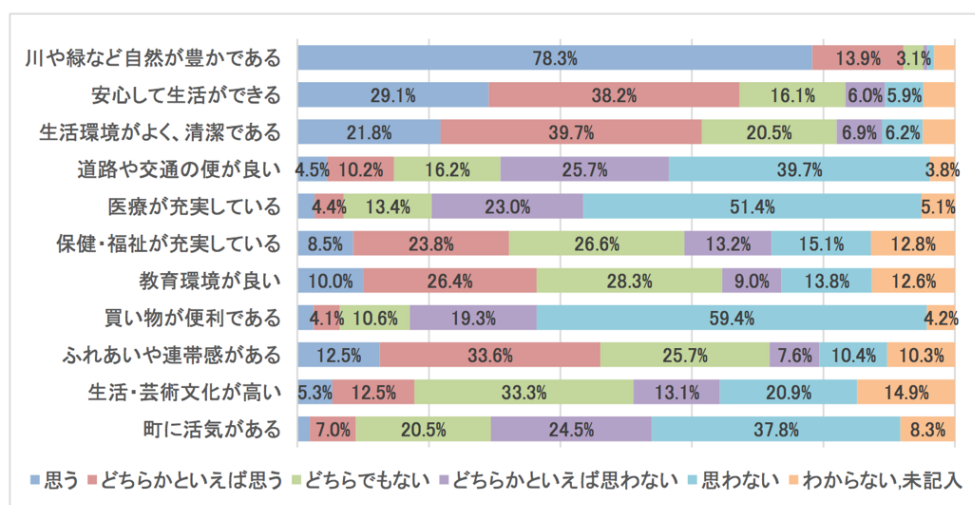


図1より 94.5%の住民が自然が豊かであると思っている。住民はやはり街に対して自然が豊かであるというイメージを持っている。

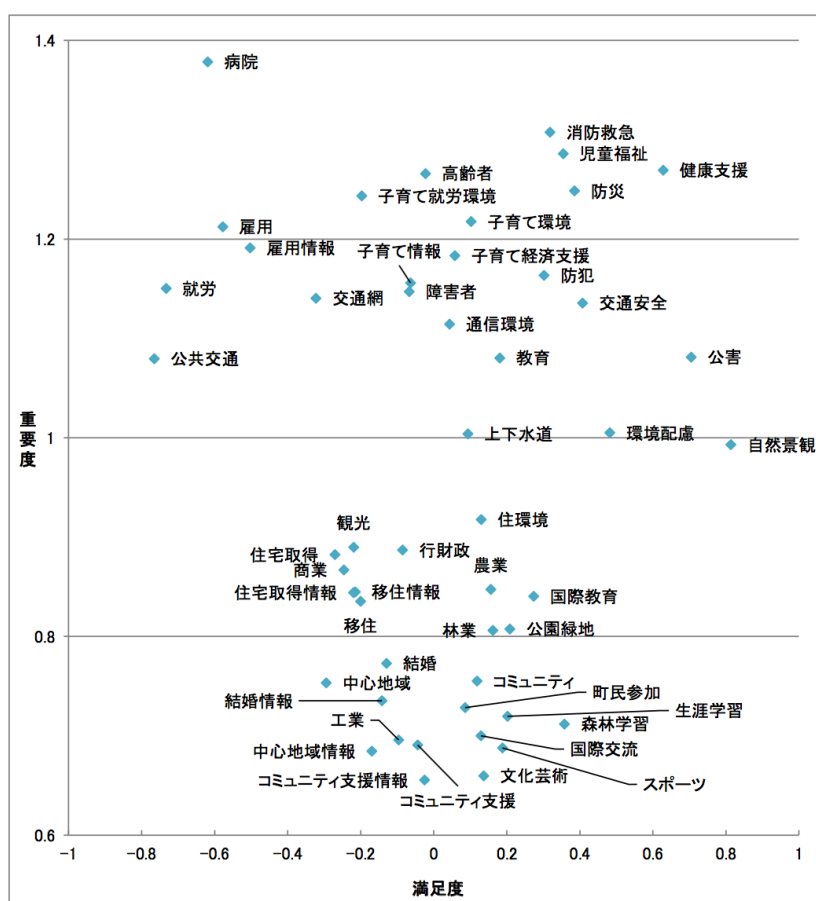


図2 住田町住民が感じる町の取り組みに対する満足度と重要度

出典：住田町（最終閲覧日：2018年12月11日）

<http://www.town.sumita.iwate.jp>

また図2から自然景観への満足度が高いこともわかる。

7-5. 考察

以下の表はヒアリング調査結果をもとに、町内外の人がどんなところに魅力を感じる傾向があるのかを可視化するための表である。

表4 内外の人の感じる魅力の違い

職業	住田にずっと住んでいる人	内部2（移住者）		外部
		住田に移住してきた人	住田に移住してきた人	住田町民以外の人
農業	静か、空気、水、海の綺麗さ、地形の恵み（自然） 頑丈に作られた家、住み良い街、挨拶（人） 気仙ロックフェス、牧場、スターツッチングなど（イベント） 外の人に向けて：自分たちの当たり前を魅力と感じていると思う。			
公民館館長	森林業日本一、豊かな自然（自然） 伝統的な蔵並み、種山、身近にあること（町）			
復興支援団体員				人材の宝庫、都会では育たない人格、人の暖かさ（人） 誰かが生きる技術を持っている町（人） 家族のような雰囲気（人） アウトドアに適した土地自然豊か（自然）（イベント） 外のからきた人から見ても、 外からきた人は住民が当たり前と感じていることを魅力と感じているように思う
地域おこし協力隊				
SUMICA		外の人を受け入れてくれる、やりたいことに挑戦できる（人） 蔵並、森林浴ができる（町）（自然）		
役場職員	緑や雰囲気（自然） 居心地の良い場所、好きな場所（町） 一度外に出て改めて人の暖かさを感じる（人） ＝やはり外から見た住田の魅力は一番は人なのでは！ 移住者は人の暖かさに慣れる！町民が自分の街に自信を持つことが必要			
自分たち				人の暖かさ（人） 豊かな自然（自然）

女性
男性
高齢者65歳以上
若年層10代～45歳
赤字：興味深い内容

（人）＝人の温かみという魅力、（自然）＝自然環境の良さという魅力、
（町）＝街並みの良さの魅力、（イベント）＝イベントの魅力

表3より、内部の人（ずっと住田町に住み続けている人）は年齢に関係なく自然の豊かさを最も魅力に感じていることがわかった。

一方、同じ内部でも移住して来た人（外から来た人）や外部の人は住民が当たり前と考えている家族のような雰囲気、人の暖かさを魅力に感じやすい傾向があることがわかった。

また先行研究では人づきあいに関する調査で地元住民それぞれの面から壁があるものの、多くの移住者がその壁を超え人の温かさを感じていることが明らかにされたが、今回の研究結果から移住者など外部から来た人（後に内部の人となった人）がより人の暖かさを魅力に感じやすい傾向があることはこの先行研究と合致する傾向であると言えるのではないかな。

さらにまちづくり活動が連帯するためには、地域性の認識を共有することが課題として存在することが明らかにされたが、今回のヒアリング調査で明らかになったように、外部の方と内部の方の町の魅力に対する認識が異なっていたことから考えると、それぞれの住民の方が思うこととなった魅力を共有することは、さらなるまちづくりの連帯を達成することができると言えるのではないかな。

また、「広義のまちづくり」は住民主体の「地域を魅力あるものにしていく諸活動（福祉・

環境等の分野を含む)」であることが明らかにされたが、そこから住田町は住民主体で行なっている活動が多く見受けられ、これらは広義のまちづくりであることが今回の調査結果と合わせてわかった。それに伴い、住民が魅力に気づくまちづくりとは、広義でのまちづくり、すなわち住民主体で行われることが前提にあると言えるのではないかな。

さらに調査前は、移住者や観光客は自然や町並みに憧れその地域にやってくるものであると考えていたが、実際には移住者は人に憧れてやってくるということがヒアリング調査で明らかになった。

同じ内部でも住民と移住者が感じる魅力には違い（住民がより魅力と感じているものが自然、町並みなのに対し、移住者＝人の暖かさ）があるが、それは「移住者は人に憧れてやってくる」という考えと一致する。よってこれはこのような傾向が現れる理由と言えるのではないかな。自分の予想とは一致しなかったが、上記の理由は頷けるものであり、興味深いものであると考える。

また、地域おこし協力隊の方へのヒアリング調査結果から、外に魅力を発信することよりも先に、地域の価値を高めることが重要であるということがわかった。

この研究をするにあたって、テーマの問いを考える際、当初は魅力に気づけない人をどうしたら良いかを検討しようとしていた。しかし地域おこし協力隊の方の、「必要ないと考えている人には関わらない、まずは自らが楽しんで地域を盛り上げる」という回答からヒントを得て、このテーマは気づけない人を問題視しながら解釈すべきものではなく、少しでも多くの人に街の魅力を知ってもらいたい、気づいてもらいたい、という気持ちを根底に解釈を進めるべきなのではないかと気づき、研究することができた。

7-6. 結論

今回の研究から、住民がその地域の魅力に気づくまちづくりとは以下のようなものではないかと考える。

同じ内部の中でカテゴライズされた元々の住民や移住者、さらに外部の観光客とでは感じる魅力が違うということを理解した上でどのような活動を行なっていくか検討して行うことが重要であるもの。またこのようなまちづくりをするためには、住民が主体となって、PRのみならず地域の価値を高めることを第一に進め、町民が自分の街に自信を持てるようにすることが必要である。

7-7. 参考文献

大橋 幸子・湯原 麻子・神永 希（2011）「地方部への移住者の意識にみる 地域の魅力に関する調査」

杉山,天心（2015）「住民の地域認識と『まちづくり』活動：旧京北町を事例として」

渡辺俊一（2011）「『まちづくり定義』の論理構造」

資料編

資料 1. 最終報告会の概要

日時：2019.2.15(金)午後4時～6時

場所：住田町町民ホール

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 研修報告

◆処方1～とどまれる

(1) 雇用のあり方：「住田町で働く人を増やすには」

(総合政策学部2年 足立百音)

(2) 教育のあり方：「将来のUターン人材への効果的な進路支援とは」

(総合政策学部2年 増田珠美・橋口文実)

◆処方2～呼び込める

(3) 観光のあり方：「住田町を訪れる人口増加のために効果的な取り組みとは」

(総合政策学部2年 保木祥声)

(4) 移住環境整備のあり方：「地方への移住・定住促進に求められる住環境整備とは」

(総合政策学部2年 堀江悠希)

◆処方3～混ざり合える

(5) 祭りのあり方：「住田町における祭り・イベントのあり方とは」

(総合政策学部2年 佐多紀香)

(6) コミュニティ施設のあり方：「人を呼び込むコミュニティ施設とは一まちや世田米駅を参考にして」

(総合政策学部2年 丸田彩夏)

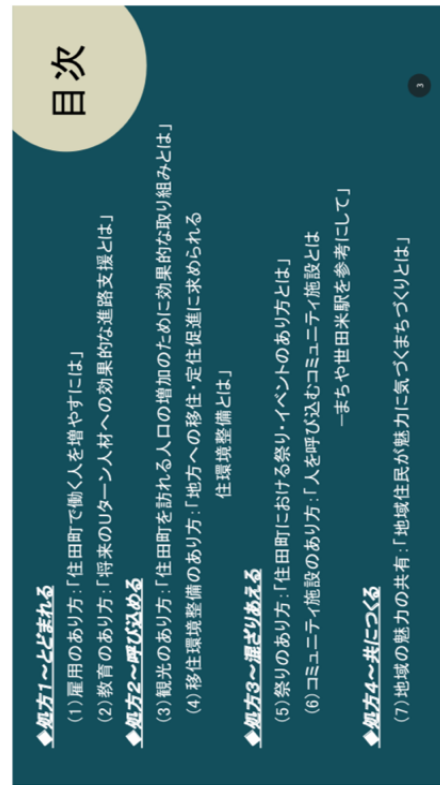
◆処方4～共につくる

(7) 地域の魅力の共有：「地域住民が魅力に気づくまちづくりとは」

(総合政策学部2年 雨宮ゆうか)

- 4 閉会

資料 2. 最終報告会資料



住田町で働く人を
増やすには

津田塾大学総合政策2年
足立百音



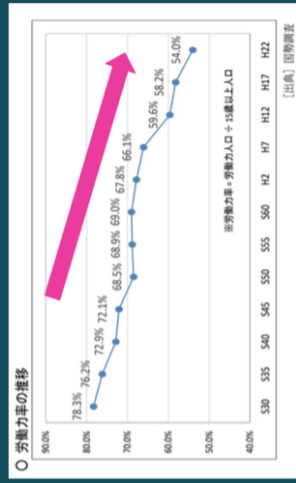
目的

住田町の雇用について考察し、
雇用を増やすために何ができるのか、
大学生である私の視点から提案する。



背景①

労働力人口の減少



背景②

雇用・雇用情報

満足度が低く、重要度が高い

方法

ヒアリング

文献調査

事例調査

9

結果① ヒアリング

- ・利益を生み出して働ける環境を整える必要がある。
- ・これまでやってなかったことにも予算を出してくれるなど、役場は積極的に未来のことを考えている。
- ・人との繋がりがや家庭の事情によって、将来住田町で働きたいと考えている。
- ・家の製造業の後継者がいない。

結果② 文献調査

(1) 北海道のIT関連産業

IT産業が札幌に集まっている地域がある。ここで働く人は、北海道大学の卒業生や東京で就職した後Uターンしてくる人もいる

(2) デザイン産業

デザインはサービスだと思われやすい。商品のデザインをするデザイナーは、製造業と結びつかないと専門ビジネスにならない。

8

結果③ 事例調査

(1) 島根県隠岐のテレワーク

- ・テレワーク＝パソコンなどの技術を利用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方

(2) 福岡県豊前市のサテライトオフィス

- ・サテライトオフィス＝大企業のコールセンターなど一部の業務を請け負うセンター

(3) 三重県の本工ワークショッブ

- ・家具作り教室などのプログラムを展開している。
- ・大学生の参画によって進められている。

考察

- 雇用の充実が必要
- 教育機関や他の産業との協力が効果的
- IT産業やデザイン産業の雇用の充足は将来的にも有効

13

結論・提言

①木材のワーケーション

概要：一般の人が、実際に木と触れ合える場所を作る

利点：

1. 首都圏の学生と住田町の交流
2. 後継者不足の解消
3. 製材所の知名度の上昇
4. 観光業の活性化

14

結論・提言

②テレワークの推進

概要：

テレワークでできる様々な働き方を、積極的に紹介していく

ポイント：

1. 様々な業種がある
2. 時間の融通がきく
3. 通勤時間が省ける

15



将来のUターン人材への
効果的な進路支援とは？

津田塾大学総合政策2年
増田 珠美、橋口 文美

テーマと目的

①地方地域の高校に所属している生徒

②住田高校に所属している生徒

両者が抱える進路への障壁を明らかにし、
住田町に適合した進路支援を探索する

→若者にとって展望の持てる地域づくりへ！

10

背景:各々が抱える障壁の傾向

	進学に向けて	就職に向けて	その他
高校生	受験勉強 負担する奨学金	地元産業と 地元就職の イメージギャップ	自身の将来を具体的に 考える機会の不足
学校	県内志向	県外志向	進学/就職の指導 バランス
親	進学・就職の情報不足 (進学については、経験不足も含む)		伝統的家族観の内面化 による進路選択の狭小
近隣住民	学生による主体的な進路指導が 行われているのか		学生の自信につながらる経 験の有無

方法

方法1:資料研究

- 使用した資料:
 - 「住田高校ヒアリング調査」(2018年4～6月)
 - 「住田町総合教育会議資料」(2018年)

方法2:ヒアリング調査

- 対象:住田高校生、一般社団法人SUMICA
- 時期:2018年8月1日～4日

11

結果1:現在の住田の進路支援

地域密着型学習

- ・地域創造学
- ・多数の研究部会による活動

学習支援

- ・教育コーディネーター設置
- ・『町の自習室』設置
- スタディサブリの活用
- 学習支援スタッフ設置

12

結果2:住田高校生たちの「3つの不足」

- 1 自発的な行動を実施する自信
- 2 地元に住む方々との交流
- 3 町外の人と交流する機会

23

考察

- あるべき進路支援には、以下の3つが必要だ
 1. 経済的視点で見た将来のプラン
 2. 高校生が自発的に考えるきっかけ
 3. 自身の視野を広げるための交流・情報交換
- 住田町で求められている進路支援は、以下の2つだ
 1. 住田町内外の人と接し、情報・影響を得ること
 2. 住田町の暮らし・働き方をよく知り、分析する

23

結果3:一般社団法人 SUMICAの方針

- 1 住田活性化のため
- 2 住田の将来のため
- 3 住田の未来を担う子供達のため

『SUMICulture』
様々な分野で活躍する方々をお招きし、事例を参考にする勉強会。

『LIFE+』
住田という土地で、子供から大人まで、みんなが本物を知る体験をする。
“普段の暮らしにちょびりスパイスを”

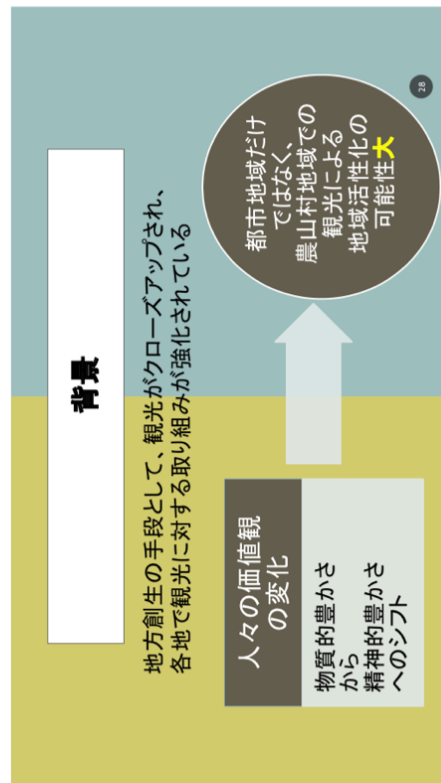
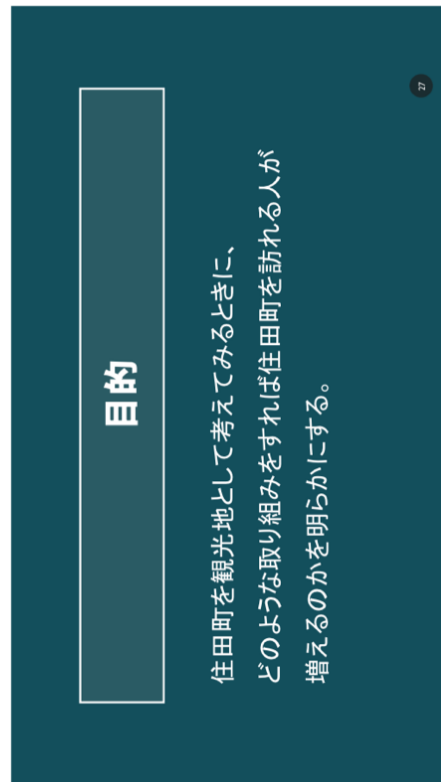
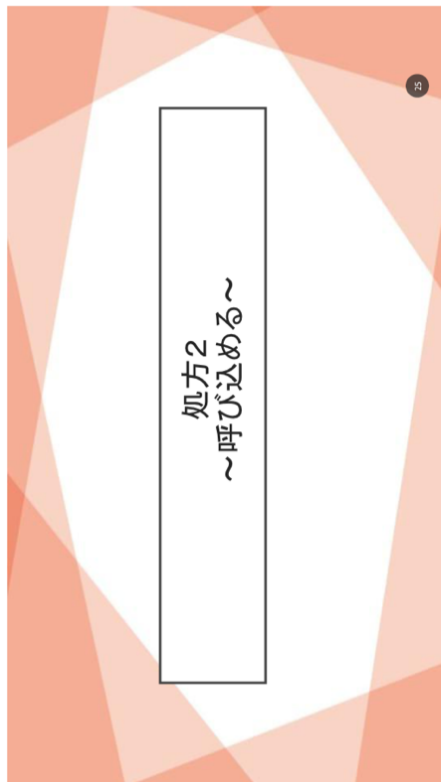
22

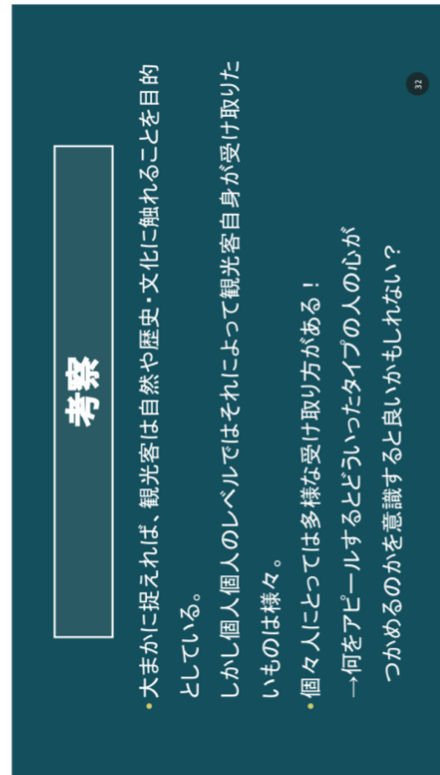
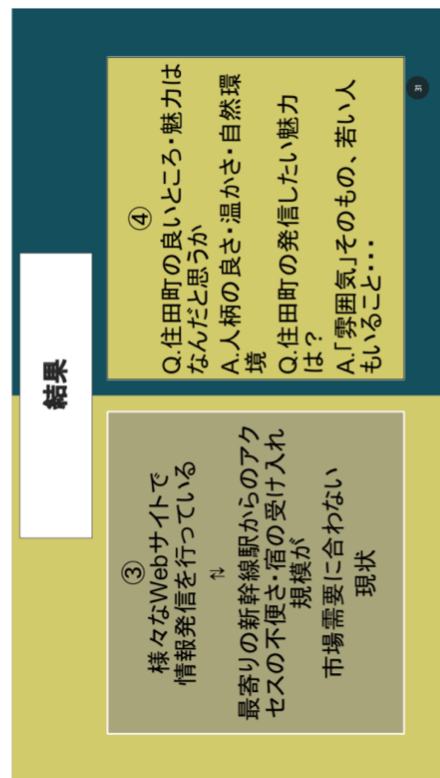
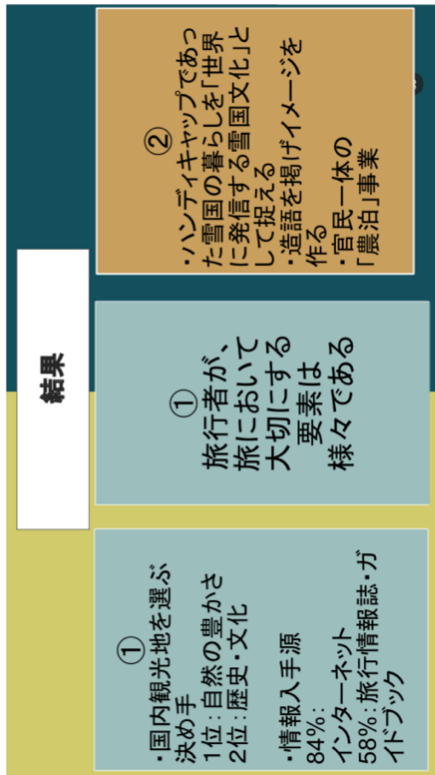
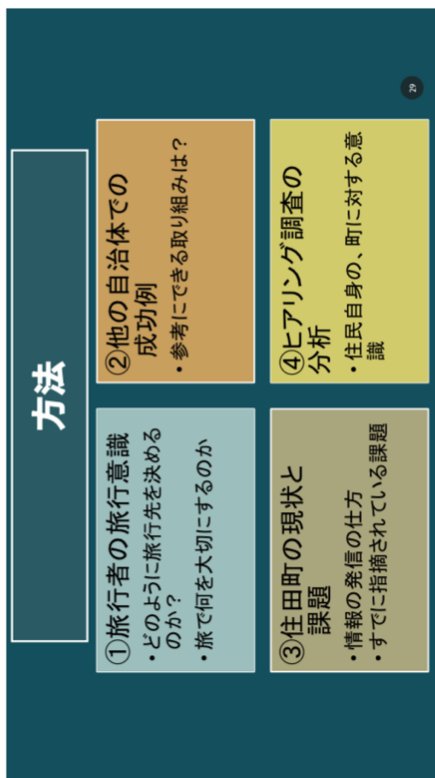
結論・提言

将来のUターン人材への効果的な進路支援とは？

- (1) 生まれた土地の良さを実感しつつ、
地元とどう付き合っていくかを考える機会
- (2) 地方で暮らしていくことの可能性を広げてくれる機会
→ 町の人と密接した進路支援
(一般社団法人SUMICAさんと協力・町の自習室の規模拡大)

24





考察

- どの成功事例を見ても、地域住民と自治体が話し合いを重ねて理解を深めている。
- ヒアリングから、多くの方が自然の良さに自信を持っていることがわかる。それは統計的に旅行者が観光地に求める要素と変わってはいない。

33

結論・提言

アクセスの不便さを単に不利と捉えるだけではなく、ポジティブに捉えることもできるのではないだろうか。

民泊の受け入れ規模の拡大、観光ルートを創出しWebサイトに載せ情報発信する。

34

結論・提言

住田町を訪れる人口の増加のために効果的な取り組みとは？

どんな地域として認知されたいのか、どんなイメージを持たれたいのかを明確にする取り組み

地域の人自身の、町に対するイメージや認知されたいイメージの確立につながる

他の自治体と同じになることはないのであるのでは？

魅力と云えるのでは？

十分観光客は惹きつけられるのではないだろうか？

35

地方への移住・定住促進に求められる住環境整備とは

津田塾大学総合政策2年
堀江悠希



目的

地方移住・定住の障壁となっている
住宅環境整備における課題、
またその解決策を明らかにする。

37

背景

- 少子高齢化、地域の過疎化の急速な進行
- 若者の地方移住希望者の増加
- 人口増加した過疎市町村における人口増加要因で「家」が最も高い

38

	1985 - 90 年	90 - 95 年	95 - 2000 年
企業立地、企業誘致による就業の場の拡大	32 (47.1)	47 (42.3)	21 (23.9)
第1次産業従事者の定着、増加	9 (13.2)	4 (3.6)	6 (6.8)
地元の新規工場による活性化施策	7 (10.3)	9 (8.1)	15 (3.6)
近地分譲、公営住宅建設等の住宅整備	22 (32.4)	70 (63.1)	62 (70.5)
生活環境整備の充実	(項目なし)	22 (19.8)	7 (8.0)
寿命の伸長による自然増加	11 (16.2)	9 (8.1)	3 (3.4)
自然増減等を求めて移住	11 (16.2)	16 (14.4)	9 (10.2)
交通体系等の整備による通勤圏化、ベッドタウン化	14 (20.6)	19 (17.1)	10 (11.4)
学校等公共施設開設による教職員、学生の居住	(項目なし)	9 (8.1)	3 (3.4)
病院、老人ホーム等の医療福祉施設の入居、入居	10 (13.2)	24 (21.6)	22 (25.0)
公共事業等工事関係者の一時的流入	12 (17.6)	25 (22.5)	12 (13.6)
宗教団体の遷出	(項目なし)	1 (0.9)	0 (0.0)
その他	12 (17.6)	11 (9.9)	20 (22.7)
合 計	68 団体 140 回答	111 団体 264 回答	88 団体 190 回答

転用集「近頃地域の現状、これまでの通住対策、通住地域の課題について」
http://www.soumu.go.jp/main_sosise/jishi_jyosai/s5-gousei/2011/kansai/kyoukan/19_03_05.pdf

39

方法

- 方法：先行研究分析
- 使用した資料

- 住田町『人口ビジョン・総合戦略』2018
- 小田切徳美・筒井一伸『田園回帰の過去・現在・未来—移住者と創る新しい農山村』農文協2016
- 小田切徳美・藤山浩・石橋良治・土屋紀子『はじまった田園回帰 現場からの報告』農文協 2015
- 山中道雄・岩本悠・田中清美『未来を考えた島の学校』岩波書店 2015
- 藤本信義 藤本信義・榎本侑司・三橋伸夫(1982)「田園移住を促進する住環境整備の公的支援策に関する研究」
- 清辺正浩「田園移住を効果的にサポートする環境整備のあり方に関する調査
- 東海新報「住宅受給ミスマッチ解消を、『長期計画』・『短期戦略』展開へ住田町」

40

結果1：地域移住にかかる初期費用

生活費（一月）	¥106,000
生活費（年間）	¥1,272,000
税金	¥100,000
国民健康保険料	¥200,000
自動車の維持費	¥300,000
合計（年間）	¥1,872,000

・ひと月にかかる費用
約15万(3ヶ月分貯金)
・自動車購入
・引っ越し代
→100万円は必要

貸物件の年間家賃→50万円
住宅購入→3843万円
(全国平均)

資料：マイブ「移住移住に備える初期費用や必要な貯金額」
<https://www.a-lifetime.com/blog/001>

結果2：住田町における住環境整備の現状

1. 空き家バンクの登録数が少ない。
2. 住宅の供給者と消費者の望む形態に差がある。
3. 町営住宅の倍率が高い。
4. 町内における民間賃貸住宅の空室情報のホームページ掲載がほぼない。

結果3：成功例（島根県海士町）



「産業体験住宅」

「島のIT移住
体験ツアー」

考察

- 移住決定の重要な要因である住宅環境の整備が必要
- 戸建て住宅が多い地域では若者の需要に合致する物件が少ない
- 住田町外からの移住希望者の求めるニーズに対応する情報・物件の提供が不十分

結論・提言

- 住宅情報のネット掲載、空き家バンクへの登録推進
- 地域住民が求める人材を明確にすること
 - 林業移住体験ツアーといった林業に従事する人々に特化した住宅環境整備

45

処方3 ～混ざりあえる～

46

研究の目的

- 住田町における祭・イベントの働きとは何か？
- 住田町において祭・イベントはどのような在り方が良いのか？

48

住田町における 祭・イベントの在り方

津田塾大学総合政策2年
佐多紀香



47

先行研究

1. 岡 絵理子 (2003)「市街化と祭 兵庫県三田市を事例に」
2. 中嶋小代子 (2011)「地域社会と祭り-祭りの社会的機能の研究-」
3. 大島里美 (2009)「『IV. デジタル化の影響(2)-ライブの復興(リアル価値の高まり)-』音楽産業構造の変化によるアーティスト自立および地域再生の可能性」

48

先行研究1 兵庫県三田(さんだ)市「貴志御霊神社の秋祭り」を例に

年配の男性

- 男性としての役割を果たす
- 祭は義務的なもの

若い世代

- 雰囲気と楽しさ
- 主体的に参加

49

先行研究2 東京都西東京市 田無の団地の祭を例に

「祭はあるべき」

- 地域に愛着
- 和を大切に

「ないほうが良い」

- 近所付き合いをしたくない
- 参加しづらい

50

先行研究3 野外音楽フェスティバルを例に

2000年代 以前

近くに
アーティストが
来るから見に行く

2000年代 以降

たとえ遠くても
見に行く

51

住田の実例

例) 遊休農地でのそばの栽培

例) 鹿踊り

例) KESSEN ROCK FESTIVAL



31

考察: 緑日的な祭

年配世代と若い世代の目的を達成するには?

- 祭の実行委員による積極的な参加の呼びかけ
- 早期のスケジュールの確保

考察: 自治会によるイベント

機能は? 予定通りに計画が進まないときは?

- 世代間の交流
- 自治会どうして相談 & 役場に相談する機会を設ける

34

考察: 伝統行事

存続するには?

- かたちを変えて受け継がれる
- 若い世代に知ってもらうには?
- 幼いうちに慣れ親しむ

考察: 近代的なイベント

機能は?

- 住田町内外で交流を生む機会をつくっている
- 若者に住田町の良さを再確認させている

32

結論

祭・イベントの体系化

- 伝統か? 近年発足したか?
- 内に向けてか? 外に向けてか?

継続にはきかけづくりが大切

- 住民それぞれの思いを理解した上で参加者が協力し合う必要がある!

38

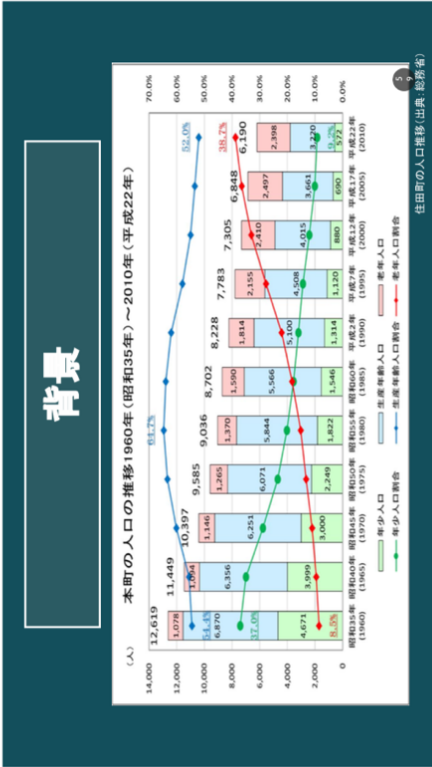
人を呼び込む
コミュニティ施設とは
—まちや世田米駅を参考にして—

津田塾大学総合政策2年
丸田彩夏

目的

住田町の人口増加につながるような、人を呼び込むコミュニティ施設が、どのようなものであるかを考える。

58



考えられる弊害

1. 日常的なサービスの減少による更なる人口減少
2. 労働不足による、生産量の減少
3. 専門人材の流出
4. 教育機関・文化継承への影響
5. 公共交通機関の需要と供給の不一致
6. 地域コミュニティの共助機能低下
7. 地方財政の硬直化

参考:住田町人口ビジョン

考察・結論

人を呼び込めるコミュニティ施設とは

1. 定期的な施設の情報発信
2. 豊かな活動内容
3. 地域特有の催し・商品の提供
4. 楽しんで活動を行えるスタッフ

63

まちや世田米駅

人を呼び込める
コミュニティ施設の条件



外部者・異世代と交流の場

住民の
ニーズ

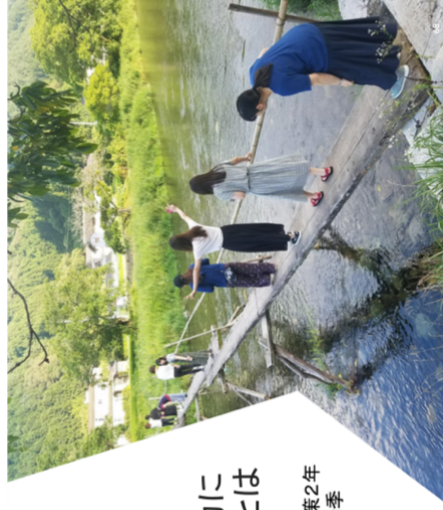
64

処方4
～共につくる～

62

地域住民が魅力に
気づくまちづくりとは

津田塾大学総合政策2年
雨宮ゆうか、森崎瑞季



目的

住民が地域の魅力に気づくことのできる
まちづくりとはどのようなものか
を明らかにする

69

重要

背景

自分の住む街に魅力を感じられること
定住者維持に繋がるのでは

町外住民にも魅力を発信可能
移住者増加への期待

地域過疎化問題への対応
社会的に深く掘り下げるべき

70

方法

- 方法：ヒアリング調査
- 対象：住田町住民の方、またその近隣住民の方
- 時期：2018年8月1日～4日

71

結果1

質問内容：住田町の魅力はどのようなところですか

対象者	対象者の職業	魅力に感じていること
民泊登録者	農業	静かなところ、空気や水が綺麗で安全なところ。頭丈に作られた家。美味しい川魚がいるところ。 <u>レジャーが充実しているところ。</u>
公民館長	公民館長	森林業日本一で豊かで恵まれた自然があるところ。

72

結果2

質問内容:住田町の魅力はどのようなところですか

対象者	対象者の職業	魅力に感じていること
地域おこし協力隊	地域おこし協力隊	家族のような雰囲気があるところ。アウトドアに適しているところ。
SUMICA	SUMICA	外の人を受け入れる雰囲気。やりたいことにチャレンジする機会がたくさんあるところ。人の優しさや暖かさ。森林浴ができるところ。伝統的な職並み。
住田町役場職員	役場職員	緑や雰囲気、豊かな自然、居心地がいい場所であるところ。
仮設コミュニティ 代表	復興支援	人材の宝庫である町であるところ。人の暖かさ。生きる技術を持った町であるところ。

考察

仮説とは反して、住民は町の魅力を感じている。
 しかし同じ内部でも、
 住田で生まれ育った住民と移住者が感じる魅力のポイントには
 違いがある(自然 vs. 人の温かさ)
 そのため地域の魅力発信が
 うまく機能していないのではないか。

75

結果3

対象者:地域おこし協力隊
 質問内容:活動に際しての心がけは何ですか。

回答内容:魅力発信やPRのためのみならず、地域の価値を一つずつ高めることが必要であると認識している。加えて、観光に力を入れて地域をおそろそろにするのではなく地域を盛り上げ、その楽しいところを見に来てくれる人が増えるといいと思って活動している。

74

結論・提言

地域住民が魅力に気づくまづくりは...
 ・内部の人(元々の住民)と外部の人(移住者、観光客)とでは
 感じる魅力が異なるということを理解する。
 ・住民が主体となって行うもの。
 ・PRのみならず地域の魅力をまちづくりの価値として高める。

76

資料 3. 最終報告会のアンケート結果

平成31年2月15日開催 津田塾大学現地報告会参加者アンケート(提出者分)									
質問									
1	町では津田塾大学と連携協定を締結し、大学と連携協力しながら地域課題の解決につなげようと呼びかけようと呼びかけています。このような大学との連携の取組に期待することはありますか								
2	津田塾大学と町の連携協定の二環として実施された今回の報告会は今町にとって有意義だと思いますか。その理由も教えてください。								
3	学生の報告の中で印象に残ったものはなんですか。その理由も教えてください。								
4	今回の報告を通じて、学生の成長や学びの観点からお気づきの点やご御言も、改善すべき点を教えてください。								
5	その他、自由に感想等を教えてください。								
性別	年代	居住地	職業	1	理由	3	4	5	
男性	10	上有住	学生	地域学生の幅広い選択ができるようになる	大変有意義	地元にいずれ帰ってくる人にとっては大変有意義な報告会だったと思う	大学生が解説をするために、一つ一つのステップを説明しているところ。これが大学生レベルの報告で、とてもレベルが高くていいと思った		とても勉強になりました。この報告会のことと同級生に伝えていきたいと思っています。
女性	20	世田米	公務員	定期的、継続的に住田に来ていただくこと。小〜高まで、教育機関を訪れていただくこと	有意義	学生さんが考えていることを、改めてうかがえたから	大変まとまっている資料で、発表のクオリティの高さに驚きました		
男性	40	町外	その他(団体役員)	学生との定期的な交流、地域行事への参加など。フレッシュなアイデアの蓄積と実験的試行	大変有意義	住田の地域課題への発想のヒントがたくさん得られました。外部の若者から見、着目すべき重要な課題を絞り込んだり、整理することでも有効な着眼点を知ることができました。	「テラワーク」…地方創生の重要な働き方「ハンドをポジティブに…地域ではなかなかできない発信」「住田で暮らしていく可能性」…可能性を客観的に評価してみたい	他所の事例もふまえて、住田を評価しているやり方は、とてもいいと思います。全国津々浦々を視野にいれつつ、住田に向き合っていると思います。	
男性	20	下有住	公務員	町外からの貴重な意見や考え	大変有意義	住田に住んでいると感じないことを教えてもらった。考えつけないことを発信してくれるため	地域住民が魅力に気づく私もだが、都会と比べるとよくないことばかり考えてしまうのがくせ。自分の町の良いところを考えることが大切だと感じたため。	何回か来町してくれば、さらに見えてくることもあると思うので、ぜひ来町してください！！	
男性	20	世田米	公務員	外から見た住田の魅力、課題について考えて頂き、共に将来を考えられたらと思います。	大変有意義	ヒアリングを受けた方々も、結果を知り、学生の考えを感じることができて良かったと思います。	人口増加への効果的な取り組みに関する発表、他県の事例も大変参考になりました。	外部から住田に来られる人は、住田に何を求めているのか考えるきっかけになりました。	
無回答	70	その他(農業)	その他	交流人口の拡大	大変有意義	都会に住んでいる学生さん達が地方をどう見ているか。感想を聞けて良かった。	林業移住体験ツアーといった林業に従事する人々に特化した住宅環境整備	日本が抱えている課題を勉強して生かしたい。	

男性	70	世田米	自営業	自覚と活性化	大変有意義	処方4共につくる	処方3祭のあり方 住田の町民の参加率の高い行事は、地域の神社の祭です。 各地域での祭に向けての活動、人の動きには見るべきものが多いと思う。(H30下有住、上有住H31.5世田米です)			
男性	60	上有住	その他	外部及び若者視点の提案	大変有意義	町の課題と解決策を提示して頂いている	情報発信も大切だが、価値を高めること	WSなどでユック/話し合いを	大変有難うございました 持続可能な未来いお付き合いをお願いします。	
無回答	60	世田米	自営業		大変有意義	私たちは町内にいるのが大半なので、学生の皆さんの率直に見る感じのことを発表していただき目をさまされる気がいたしました。 もっと何ができるのか、何から取り組むべきかを考えたいと思います。		より見聞を広めて地方に、目を広げていただきたい。		
男性	無回答	世田米 町外	無職 公務員	人口減少問題 町の施策(地域課題の解決に向けたもの)を多角的視点から分析していただけると。	大変有意義 大変有意義	若い感覚で住田を想ってくれてありがとう 町外の方の目から見た住田町と、住民の方自身の感じている住田町のイメージが比較されることにより、互いにとって思考を深める機会となる。	処方2観光のあり方 「将来のウーサン人材への効果的な進路支援とは？」 教育委員会より、文部科学省・研究開発学校として指定を受けたのは(H29～H32)までで、H30～小中高すべての学校で住田町のみの特設の強化「地域創造学」を実施しております。次年度から中学校でも地域の中にある題材で学んだ子供たちが高校生に進学するので、その子供たちが考察にある進路支援によりどのような人材に育つのか継続して分析していただきたいと思います。ぜひ今後も支援の適切さ等について考察していただき、提言いただければ幸いです。	継続して交流(?)したい		

(参加者構成割合)

参加者性別		
男	8	61.5%
女	1	7.7%
無回答	4	30.8%
合計	13	

年代		
10代	1	7.7%
20代	3	23.1%
30代	0	0.0%
40代	2	15.4%
50代	2	15.4%
60代	2	15.4%
70代以上	2	15.4%
無回答	1	7.7%
合計	13	

居住地		
世田米	7	53.8%
下有住	1	7.7%
上有住	2	15.4%
町外	2	15.4%
無回答	1	7.7%
合計	13	

職業		
学生	1	7.7%
公務員	4	30.8%
自営業	3	23.1%
無職	1	7.7%
その他	4	30.8%
合計	13	

今回の発表は		
大変有意義	10	76.9%
有意義	3	23.1%